

出土遺物解説表(第65図)

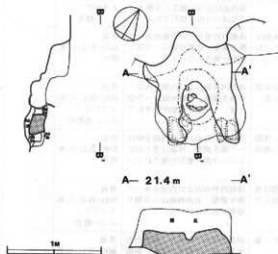
番号	器 位	重量(cm)	器 形 の 特 徴	整 形 技 法	地 成・胎 土・色 調	備 考
2	環 土 師 器	A 13. 04 B 6. 1 C 4. 0	蓋をもつ球形土器である。底部は平底で、胴部は底部から連続的に外上方へ内彎きみに立ち上がり、口縁部は胴部から外反して立ち上がる。	体部外面は横ナデ、胴部外面はへう割り後、横なへうナデ整形、内面は全体にへうナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 に濃い黄褐色	
3	環 土 師 器	A 14. 50 B 5. 5 C 14. 7	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な線を有し、外反きみに垂直に立ち上がる。	体部内外面および胴部内面は横ナデ整形。底部外面は多方向からのへう割り整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 に濃い褐色	内面に残付者
4	環 土 師 器	A 14. 7 B 3. 8 C 16. 0	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な線を有し、直線的に短く内傾する。	体部内外面および内面は磨位または放射状のへう磨き調整。底部外面は上位で横なへう磨き、下位はへう割り整形である。	普通 砂粒・長石・石英・スクリア に濃い褐色	
5	環 土 師 器	A 13. 10 B 3. 6 C 14. 40	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に線を有し、短く内傾して立ち上がる。	体部内外面および内面全体へう磨き調整。底部外面はへう割り整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 に褐色	
6	環 土 師 器	A 13. 20 B 3. 40 C 14. 40	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部から脚厚を薄くし、内傾して立ち上がる。	体部内外面および内面全体はへう磨き調整。底部外面はへう割り後、へう磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英・スクリア に濃い黄褐色	
7	環 土 師 器	A 17. 40 B 5. 20	底部は丸底状を呈するものと思われ、体部と底部との境は不明瞭で、底部は深い皿状を呈する。	口縁部内外面および内面全体はへう磨き調整。外面は多方向からのへう割り整形が施されている。	良好 細砂・長石・石英 に褐色	
8	環 土 師 器	A 17. 00 B 4. 30 C 17. 00	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な線を有し、短く内傾して立ち上がる。	体部内外面および内面全体へう磨き調整。底部外面はへう割り整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英・スクリア に濃い褐色	
9	器 白 土 師 器	D 9. 20	大型の器白脚部と思われる。脚部はやや扁平みながらさがつた後、大きく開く。	脚部外面はへう割り、器部内外面共に横ナデ整形である。脚部内面に輪積痕が明瞭に残されている。	普通 細砂・長石・石英・糖 淡黄褐色	
10	蓋 須 恵 器	B 3. 20 C 15. 20	体部は内彎きみに張り出した後、口縁部で鋭い線を有して連続的にさがる。	器全体を焼き成形後、口縁部ナデ整形が施されている。	良好 細砂・長石・石英 灰色	
11	文 脚 土 師 器		直径3.7cm、高さ11cmの内筒状を呈する。	側面は横ナデ整形が施されている。二次焼成を受けている。	良好 細砂・長石・石英 に濃い黄褐色	
12	釘 鉄 製 品		3～4mmの角柱状に作られた釘である。先端部欠損する。			

第21号住居跡(第58図)

本跡は遺跡の中央部北側、B2d₇・B2e₇を中心に確認され、第20号住居跡の北1.2mに位置し、第18号住居跡と西側で重複している。本跡の方が新しい。規模は一边が5.3mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-51.5°-Wである。東壁の一部に攪乱による張り出しがみられ、壁高は30～50cmで、壁面はゆるやかに外側へ広がりながら立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められており、壁下には幅10～13cm、深さ5cmの浅い溝が、ほぼ全体に周囲する。ピットは6個確認され、P3～P6は直径25～43cmの円形を呈し、深さは67～92cmと深く、柱間の距離は2.6mで、主柱

穴と考えられる。竈南のP7は直径50cmの円形を呈し、深さは67cmである。貯蔵穴ではないかと思われるが、平面形・深さなどを他の住居跡の貯蔵穴と比較すると、異質のピットであることなどから貯蔵穴とは決めがたい。

覆土は全体にロームブロック・ローム粒子などを多く含み、色調は黒褐色で柔らかく、レンズ状の自然堆積の状態を示している。



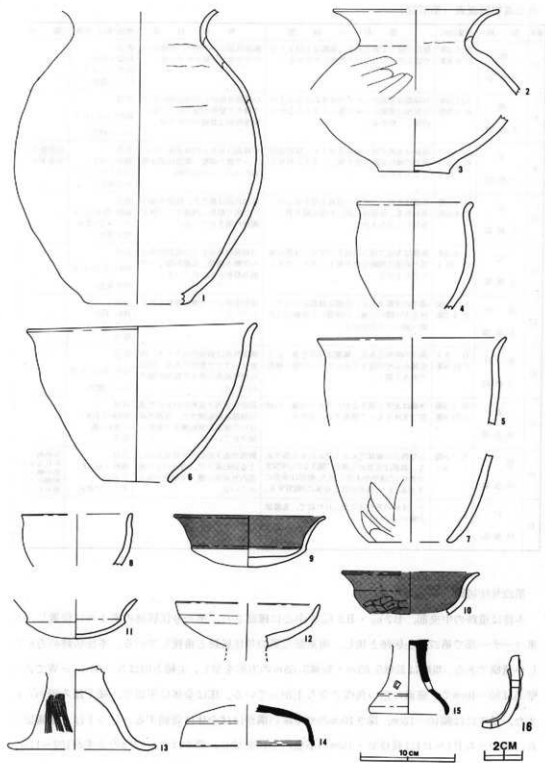
第66図 第21号住居跡竈実測図

出土遺物解説表 (第67図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 土器	B 30.90 C 11.00	口縁部は頸部から垂直ぎみに立ち上がった後、大きく外反して開く。胴部は底部から中位で最大に膨らみながら立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 スコリア 褐色	
2	壺 土器	A 17.60 B 9.40	口縁部から胴部上位の破片である。口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がる。胴部は頸部から大きく張り出して内彎ぎみにさがる。	口縁部内外面は横ナデ整形、胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
3	壺 土器	B 5.60 C 7.5	底部の破片である。底部は平直で、胴部は底部より大きく内彎ぎみに外上方へ立ち上がる。	胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 スコリア 褐色	底部に木葉痕有り。
4	小型壺 土器	A 12.1 B 11.00	底部のみを欠損する甕である。口縁部は短く外反して立ち上がり、胴部は頸部から張り出し、胴部最大径に至る。	口縁部内外面共に横ナデ整形、胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 明黄褐色	
5	瓶 土器	A 19.70 B 9.40	口縁部は頸部から直線的に外側へ開いて立ち上がる。胴部は頸部からやや膨らみをもちながら内彎してさがる。	口縁部内外面共に横ナデ整形、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
6	瓶 土器	A 24.2 B 16.8 C 7.1	口縁部は頸部から短く外反して立ち上がる。胴部は頸部からやや膨らみをもちながら内彎してさがる。	口縁部内外面共に横ナデ整形、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい褐色	

遺物は、P4周辺から土師器を中心に少量出土する。P6西側覆土上層から須恵器の器台形土器(第67図-15)、P4の北西から環形土器(第67図-9)が床面上から正位の状態出土している。

竈は北東壁中央部に付設され、長さ120cm・袖幅84cm・焚口部幅38cmで、袖部は黄灰色の粘土で作られ、前部には凝灰岩を直方体に加工して埋めて補強をしている。焼成部は壁を60cmの幅で24cmほど掘り込み、火床は長径40cmの楕円形を呈している。遺物は焼成部上層から壺形土器(第67図-1)が正位の状態出土している。



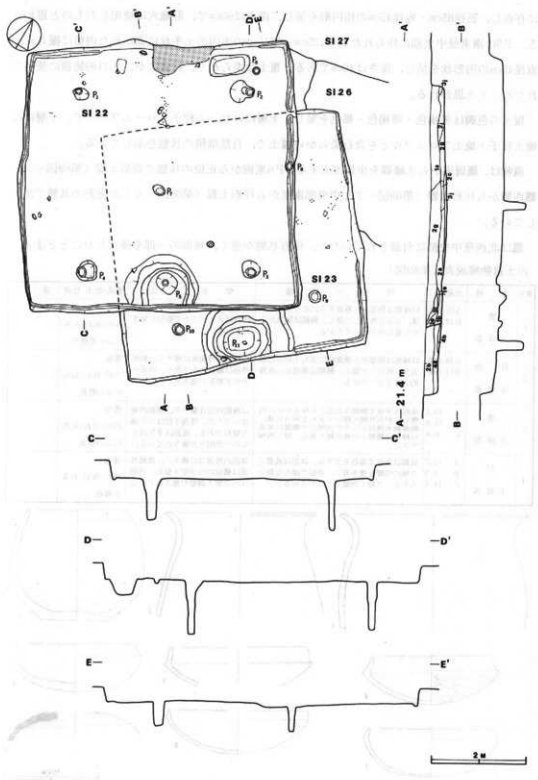
第67图 第21号住居跡出土物実測図

出土遺物解説表（第67図）

番号	部 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	整 形 法 法	焼成・胎土・色調	備 考
7	底 土 師 器	B 9.2cm C 8.8cm	胴部下位の土器である。胴部は上位よりやや狭らみをもちながら内傾してさがる。	胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・スコリア に白・褐色	
8	底 土 師 器	A11.5cm B 5.9cm	口縁部は胴部からやや外反さみに立ち上がり胴部は胴部からやや狭らみをもちながら内傾してさがる。	口縁部外面から内面全体にかけて横ナデ整形が施されている、胴部外面は焼減のため不明。	普通 砂粒・長石・石英 に白・褐色	
9	底 土 師 器	A 15.8 B 5.4 C 12.1	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明確な線を有し、大きく外反して立ち上がる。	口縁部外面から内面全体にかけてヘラ削り調整。胴部外面は磨減がはげしいため不明。	普通 細砂・長石 石英・スコリア 明赤褐色	底部除き内 外面朱塗り。
10	底 土 師 器	A14.3cm B 4.5cm	底部は丸底でやや深い皿状を呈するものとされる。体部は底部との境に線を有し、外反して立ち上がる。	体部外面は横ナデ、底部外面はヘラ削り整形。内面はヘラ削り調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 ・スコリア・雲母 明赤褐色	
11	底 土 師 器	B 4.2cm C 10.4	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明確な線を有し、大きく外反して立ち上がる。	口縁部内外面および底部内面はヘラ削り調整。底部外面はヘラ削り整形が施されている。	良好 細砂・長石・石英 明赤褐色	
12	高 底 土 師 器	A15.0cm B 4.7cm	高底の受部である。受部は胴部から大きく外上へ開いた後、口縁部から直線的に外側へ開いて立ち上がる。	受部全体にヘラ削り調整が施されている。	良好 砂粒・長石 石英・スコリア 緑色	
13	高 底 土 師 器	B 8.4 C 15.6cm	高底の胴部である。胴部は厚みを薄くして受部からやや開ききりにさがる。胴部は内外面共に横ナデ整形が施されている。	胴部外面は横ナデのヘラナデ、内面はヘラナデ整形である。胴部は内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 に白・褐色	
14	蓋 須 恵 器	B 4.3cm C 13.9cm	体部は大きく固きながらさがる。口縁部で丸縁をもって垂直さみにさがる。	器全体未焼成形が行われた後、口縁部は回転横ナデ、体部外面はヘラ削りの回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・長石粒 石英・緑 灰色	
15	器 台 須 恵 器	B 7.8cm C 8.1	小型器台の脚部であると思われる土器である。脚部は受部から僅かに開きながら中位までさがる後やや大きく開き、胴部は垂直にさがる。また、裏面の孔を全体に3個有する。	胴部外面上位はカキ貝状工具による回転横ナデ、内面および胴部内外面共に横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・長石粒 石英粒 オリーブ黒色	白熱焼と思 われる黄褐色 の焼成が 胴部に多く 見られる。
16	釘 鉄 製品		3～4mmの角柱状に作られた釘で、先端部が曲がっている。			

第22号住居跡（第68図）

本跡は遺跡の中央部、B2e₀・B2f₀を中心に確認され、第20号住居跡の東1mに位置し、北東コーナー部で第27号住居跡と接し、南東部で第23号住居跡と重複している。本住居跡の方が新しい遺構である。規模は長軸5.85m・短軸5.65mの方形を呈し、主軸方向はN-30.5°-Wである。壁高は30～40cmで、垂直に近い角度で立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められ、また、壁下には幅10～12cm、深さ10cmのやや深い溝がほぼ全体に周回する。ピットは6個確認され、そのうちP1～P4は長径35～45cmの不整形円形状を呈し、深さはP1～P3の3本が102～115cmで、P4はやや浅く86cmである。いずれも主柱穴と考えられる。柱間の距離は南北が3.7m、東西が3.5mである。なお、P2の西側には補強したと思われるピットが確認された。また、P6は竈東側



第68图 第22·23号住居跡実測図

河内美濃郡工部町北野55番地 図68

に存在し、長径85cm・短径45cmの楕円形を呈し、深さは60cmで、貯蔵穴に使用したものと思われる。P5は南東壁中央部に作られた直径135cm・幅15cmの半円の土手状に築かれた内側に掘られ、直径45cmの円形状を呈し、深さは40cmである。覆土は柔らかく、貯蔵穴か、入口の施設に使用されたピットと思われる。

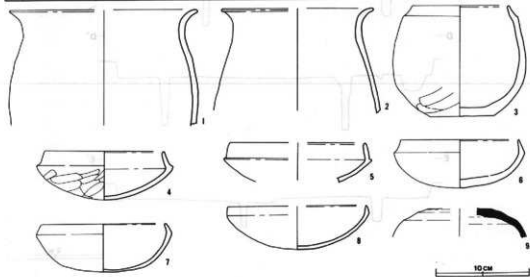
覆土の色調は黒褐色・暗褐色・褐色を呈し、上層にはローム粒子・ロームブロック、下層には焼土粒子・焼土ブロックなどを含む柔らかい覆土で、自然堆積の状態を示している。

遺物は、竈周辺から土師器を少量出土する。P6東側から正位の状態で甕形土器（第69図-3）、竈西側から環形土器（第69図-7）、中央部南東から環形土器（第69図-6）が完形の状態で出土している。

竈は北西壁中央部に付設されていたが、保存状態が悪く、袖部の一部を確認したにとどまる。

出土遺物解説表（第69図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 20.20 B 12.40	口縁部は頸部から垂直に立ち上がった後、大きく外反して開く。胴部は頸部からやや膨らみをもってさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 に濃い黄褐色	
2	長袋 土師器	A 16.00 B 11.00	口縁部は頸部から垂直に立ち上がった後、大きく外反して開く。胴部は頸部から直線的に外下方へさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面は縦位のヘラナデ、内面ヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 に濃い褐色	
3	甕 土師器	A 10.3 B 11.8 C 6.8	底部は平底で胴部は底部からゆるやかに内彎しながら外側へ開いて立ち上がった後、胴部最大径部からやや内彎して頸部に至る。口縁部は頸部との境に横を有し、短く内彎する。	口縁部内面は横ナデ、胴部内面はヘラナデ、外面は縦位のヘラナデ整形である。底部は多方向からのヘラ削りが施されている。	普通 砂粒・長石・石英 に濃い褐色	
4	環 土師器	A 12.7 B 5.3 C 14.5	底部は丸底で鼠状を呈する。体部は底部との境に明瞭な横を有し、半位で僅かな膨らみをもって短く内彎して立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面は縦位のヘラ削り整形。内面はヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 灰褐色	



第69図 第22号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第67図)

番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	整 形 技 法	施成・胎土・色調	備 考
5	環 土師器	A 14.5(9) B 4.2(8)	底部は丸底で浅い皿状を呈していたと思われる。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、中位で僅かに張り込みをもって狭く内傾して立ち上がる。	体部内外面および底部内面は横ナテ整形、底部外面はヘラ刮り整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・スコリア にふく雑色	
6	環 土師器	A 12.7 B 5.2 C 14.0	底部は丸底でやや深い皿状を呈する。器厚は立ち上がるにしたがって薄くなり、体部は底部との境に稜を有し、直線的に内傾して立ち上がる。	口縁部内外面に横ナテ整形、底部内外面にヘラ磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にふく雑褐色	
7	環 土師器	A 13.3 B 5.1 C 14.4	底部は丸底で深い皿状を呈する。器厚は立ち上がるにしたがって厚くなる。体部は底部から直線的に狭く内傾して立ち上がる。	口縁部内外面に横ナテ整形、底部外面は横ナテ整形、内面はヘラナテ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にふく雑褐色	
8	環 土師器	A 14.9(9) B 4.7 C 15.1	底部は丸底で浅い皿状を呈するものと思われる。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、中位に僅かに張り込みをもち、内傾して立ち上がる。	口縁部内外面から底部内面は横ナテ整形、底部外面はヘラ刮り後、ヘラナテ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・スコリア にふく雑色	
9	蓋 須恵器	B 3.0(6)	唇部はほぼ水平に開き、体部はゆるやかに外側へ内傾してさがる。	唇全体を浅き成形後、唇部は回転へラ刮り、その他内外面に同級横ナテ整形が施されている。	良好 細砂・長石粒 石英粒 灰色	

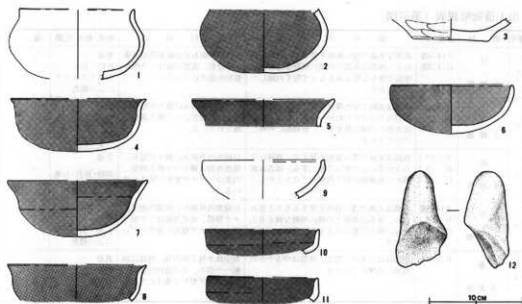
第23号住居跡 (第68図)

本跡は遺跡の中央部やや東側、B3e₁・B3f₁を中心に確認され、西側で第22号住居跡、東側で第26号住居跡と重複している。新旧関係は第26号住居跡よりは新しく、第22号住居跡より古い。規模は長軸5.2m・短軸5.1mの方角を呈し、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は25~30cmで、第22号住居跡よりもやや浅く構築され、壁面は直線的に外側へ広がりながら立ち上がっており、壁下の一部には幅7~10cm、深さ8cmの小さな溝が周回している。床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。ピットは5個確認され、P7~P10は直径約30cmの円形状を呈し、深さは49~59cmでやや浅く掘られている。柱間の距離は一辺が3mで、いずれのピットも支柱穴である。P11は南側壁下中央部に作られた「∩」形の高さ3cm、幅30~55cmの土手状の高まりをめぐらした施設の内側に掘られ、平面形は長径80cm・短径60cmの楕円形を呈し、深さは39cmで覆土は柔らかい。貯蔵穴として使用されたピットではないかと思われる。またP11に類似したピットは第5・8・11号住居跡から検出されている。

覆土は第22号住居跡に大部分が切られているため、残された上層より観察すると、全体にローム粒子・ロームブロックを含み、柔らかい。色調は暗褐色を呈し、自然堆積の状態を示している。

遺物は、土師器の破片を東側から少量出土する。東側床面直上から半完形品の埴形土器(第70図-4)が潰れた状態で、南壁中央部のベルト状の上から環形土器(第70図-6)が出土している。

竈は本跡が第22号住居跡によって切られているためか、確認することはできなかった。



第70図 第23号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第70図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	構成・胎土・色調	備考
1	小型壺 土器	A 12.0 B 7.5	底部は丸底である。胴部は底部から連続的に大きく外側へ開きながら内彎して立ち上がり、胴部最大径から内縮する。口縁部は胴部から垂直直みに立ち上がる。	口縁部内外面から胴部外面全体はへうろ調整。その他内面全体はへうろ調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい赤褐色	
2	小型壺 土器	B 6.4 (測) C 4.9	底部は平底である。胴部は底部から外側へ開きながら内彎して胴部最大径に至った後内縮して立ち上がる。胴部最大径は中位より上に有する。	内面はへうろ調整、外面はへうろ調整後、並なへうろ調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい赤褐色	内外面未確認
3	壺 土器	B 2.5(測) C 8.1	壺形土器の底部である。底部は平底で、胴部は大きく直線的に外側へ開きながら立ち上がる。	胴部外面から底部にかけてへうろ調整。内面全体はへうろ調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 黒褐色 (外) にふい褐色(内)	
4	埴 土器	A 14.3(測) B 5.7	底部は丸底である。胴部は底部から連続的に大きく開いて立ち上がった後、胴らみをもって垂直に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。	底部は多方向からのへうろ調整、その他器全体共にへうろ調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 明赤褐色	内外面未確認
5	埴 土器	A 15.2(測) B 2.8(測)	埴形土器の口縁部片と思われる。口縁部は胴部から直線的に外側へ開いて立ち上がる。	磨滅のため不明。	普通 細砂・長石・石英 赤褐色	内外面未確認
6	坪 土器	A 13.0 B 5.1 C 13.3	底部と体部との区別がなく、底部から器厚をやや薄くして内彎直みに大きく開いた後、小さく立ち上がる。	底部はへうろ調整、内面全体と外部中位まではへうろ調整が施されている。	普通 細砂・長石 石英・スコリア 赤色	内外面未確認
7	埴 土器	A 14.9 B 6.0	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部からやや外反直みに外側へ開きながら立ち上がる。	磨滅がはげしいため不明。	普通 砂粒・長石・石英 明赤褐色	内外面未確認。外面の一部に確認する。
8	埴 土器	A 13.3(測) B 3.6(測)	口縁部の破片である。口縁部は胴部からゆりやかに立ち上がった後、外反して開く。	口縁部内外面および胴部外面は丁寧なへうろ調整。胴部内面はへうろ調整が施されている。	良好 砂粒・長石・石英 明赤褐色	内外面未確認

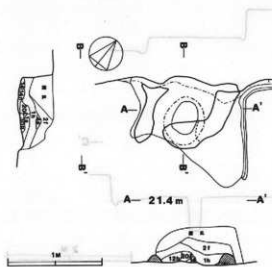
出土遺物解説表（第70図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
9	坏 土師器	A 13.0高 B 4.2高	口縁部の破片である。底部は丸底で底状を呈していたと思われる。体部は頸部から短く内傾して立ち上がる。	磨滅のため不明。	普通 細砂・長石 石英・スクリア 浅黄褐色	
10	坏 土師器	A 12.0高 B 2.7高	底部は非常に浅い皿状を呈すると思われる。体部は底部から垂直に立ち上がる。	器全体はへら磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 明赤褐色	内外面未磨り
11	坏 土師器	A 11.6 B 2.6	体部の破片である。体部は底部から垂直に立ち上がる。	器全体はへら磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 明赤褐色	内外面未磨り
12	支脚 土製品		円錐状に作られた支脚で、下部が欠損している。	指ナデ整形である。	普通 細砂・長石・ 石英・燧 赤褐色	

第24号住居跡（第72図）

本跡は遺跡のやや東側、B2 b₉・B2 c₉を中心に確認され、第29号住居跡と南側で重複する。本跡の方が古い。規模は長軸5.7m・短軸4.95mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-41°-Wである。壁高は47cmほどで、第29号住居跡よりも約20cm浅く構築され、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には幅12~18cm、深さ3~5cmの浅い溝が全体に周囲している。床は、残された床面を観察すると、全体に平坦で、硬く踏み固められている。ピットは3個確認され、いずれのピットも直径約25cmの円形を呈し、深さは53~63cmでやや深く、柱間の距離は南側が2.3m・東西が3.1mである。

覆土は第29号住居跡によって大部分が切られているため不明の点が多いが、残された部分から

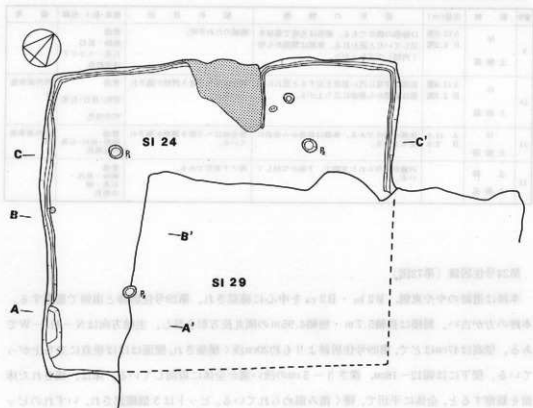


第71図 第24号住居跡竈実測図

判断して、上層は黒褐色の土が厚く堆積し、中層から下層は暗褐色・黒褐色の土が自然流入の状態で堆積していたものと考えられる。

遺物は非常に少なく、竈東側床面上から坏形土器が正位の状態（第73図-4）や潰れた状態（第73図-5）で出土している。

竈は北西壁中央部に付設され、長さ75cm・袖幅85cm・焚口部幅50cmで、袖部は黄灰色の粘土で構築されている。焼成部は壁を50cmの幅で約15cm掘り込み、内部からは暗赤褐色の焼土が多量検出された。



A—21.4 m

—A'

B—

—B'



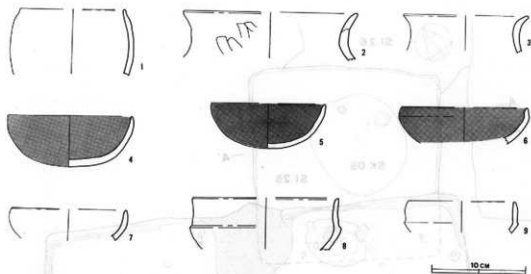
C—

—C'

2 M

第72図 第24号住居跡実測図

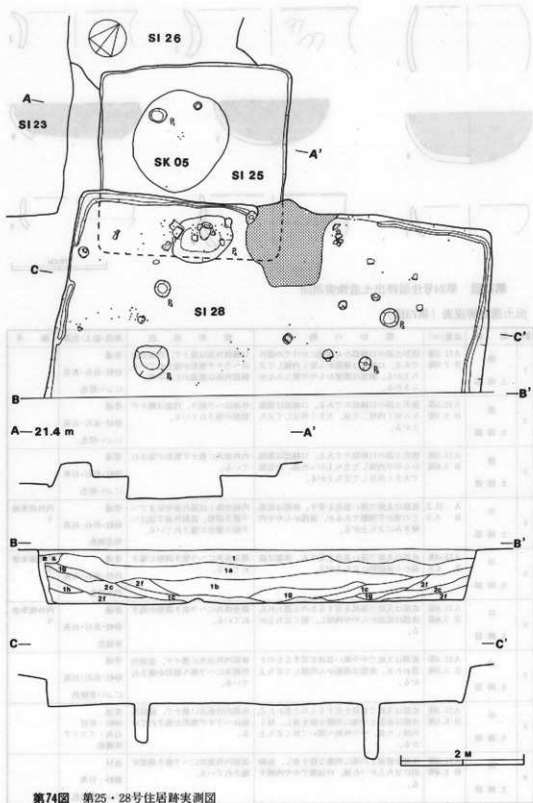
岡崎大学考古学研究所 岡崎 隆



第73図 第24号住居跡出土物実測図

出土遺物解説表 (第73図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 11.3筒 B 7.0筒	甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は頸部から短く内傾して立ち上がる。胴部は頸部からやや狭らみながらさがる。	口縁部外面は横ナデ、内面全体はヘラナデ整形が施されている。胴部外面は磨滅のため不明。	普通 砂粒・長石・石英 にふい橙色	
2	甕 土師器	A 18.5筒 B 5.1筒	甕形土器の口縁部片である。口縁部は頸部から短く内傾した後、大きく外反して立ち上がる。	外面はヘラ削り、内面は横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい橙色	
3	甕 土師器	A 13.3筒 B 3.8筒	甕形土器の口縁部片である。口縁部は頸部からやや内傾して立ち上がった後、口辺部で大きく外反して立ち上がる。	内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい橙色	
4	坏 土師器	A 13.2筒 B 5.5筒	底部は丸底で深い皿状を呈す。体部は底部との境が不明瞭であるが、底部からやや内傾ぎみに立ち上がる。	内面全体と底部外面中位までヘラ磨き調整。底部外面下位はヘラ削り整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 明赤褐色	内外面未塗り
5	坏 土師器	A 12.0筒 B 4.8筒	底部は丸底で深い皿状を呈す。体部は底部から連続的に立ち上がる。	器全体共にヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 明赤褐色	内外面未塗り
6	坏 土師器	A 13.3筒 B 3.8筒	底部は丸底で皿状を呈するものと思われる。体部は底部からやや内傾し、短く立ち上がる。	器全体共にヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 赤褐色	内外面未塗り
7	坏 土師器	A 12.1筒 B 3.3筒	底部は丸底でやや深い皿状を呈するものと思われる。体部は底部から内傾して立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部内外面共にヘラ削り整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい黄褐色	
8	坏 土師器	A 15.3筒 B 5.5筒	底部は丸底で皿状を呈するものと思われる。体部は底部との境に明確な線を有し、短く内傾した後、やや外側へ開いて長く立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・スコリア 灰褐色	
9	坏 土師器	A 11.3筒 B 3.4筒	体部は底部との境に明確な線を有し、直線的に立ち上がった後、口辺部でやや内傾する。	体部内外面共にヘラ磨き調整が施されている。	良好 細砂・石英 にふい赤褐色	



第25号住居跡（第74図）

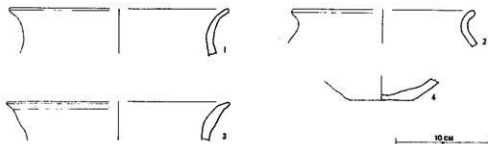
本跡は住居跡が密集しているB3 e₂を中心に確認され、北側で第26号住居跡と、南側で第28号住居跡と、住居跡の中央部では第5号土壌とそれぞれ重複している。新旧関係は第26号住居跡および第5号土壌より新しく、第28号住居跡より古い。規模は3.1×()mの方形を呈していたと考えられ、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は25cmで、第28号住居跡よりも約25cm浅く構築されている。壁高はゆるやかに外側へ広がりながら立ち上がっており、床は平坦で、硬く踏み固められている。ピットは1個のみ確認し、直径25cmの円形を呈し、深さは40cmである。

覆土は残された土層から観察すると、上層から下層にかけて黒褐色の色調を呈し、全体にローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を含んでいる。自然堆積の状態を示している。

遺物は住居跡の中央部から土師器の破片を少量出土したのみである。また竈は確認することができなかった。

出土遺物解説表（第75図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	地色・粘土・色調	備考
1	甕 土師器	A 23.4cm B 4.9cm	口縁部の破片である。口縁部は頸部から短く内傾した後、大きく外反して立ち上がる。	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・燧 礫色	
2	甕 土師器	A 19.3cm B 3.6cm	口縁部の破片である。口縁部は頸部から内傾した後、大きく外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄褐色	
3	甕 土師器	A 23.8cm B 4.2cm	口縁部の破片である。口縁部は頸部から器厚を薄くしながら大きく外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 灰褐色(外) 褐色(内)	
4	甕 土師器	B 2.4cm C 5.9	底部の破片である。底部は平底であり、胴部は底部から大きく開いて外上方へ立ち上がる。	内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 灰黄褐色	



第75図 第25号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡（第2図）

本跡は遺跡の中央やや東側、B2c₁・B2d₁を中心に確認され、南側で第26号住居跡、北西部で第29号住居跡と重複する。新旧関係は第26号住居跡よりも新しく、第29号住居跡よりは古い。規模は長軸4.6m・短軸4.55mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-11°-Wである。壁高は52cmで、第29号住居跡よりも約15cmほど浅く構築され、壁面は直線的に外側へ広がりが立ち上がっている。壁下には幅7～9cm、深さ5cmの小さな溝が全体に周回している。ピットは6個確認され、P1～P4は直径26～35cmの円形を呈し、深さはやや浅く34～56cmである。柱間の距離は2.4mで、いずれも支柱穴と考えられる。P5は南側のP3・P4の中間点のやや壁側から検出され、深さは22cmとやや浅い。入口の施設に使用されたピットかと思われる。P6は南西部コーナーから確認され、長径120cm・短径55cmの楕円形を呈し、深さは58cmである。覆土は黒褐色で柔らかく、貯蔵穴と思われる。遺物は上層から変形土器（第77図-2）が出土している。

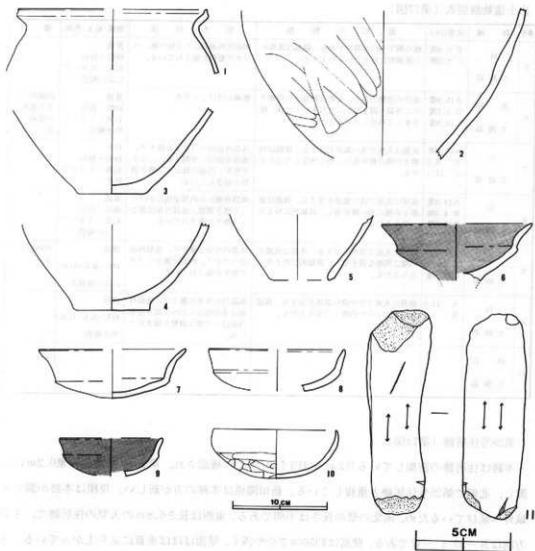
覆土は上層に黒色の土が厚く堆積し、中層～下層にかけてローム粒子・焼土粒子・炭化材を含む黒褐色の柔らかい土が自然流入の状態に堆積している。



第76図 第27号住居跡竈実測図

出土遺物解説表（第77図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	地成・胎土・色調	備考
1	変形土器	A 19.8cm B 6.7cm	口縁部は頸部から「く」字状に立ち上がり、口辺部で縁を有してやや内傾する。胴部は頸部から直線的に外側へ開きながら広がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にへラナデ整形が施されている。	良好 砂粒・長石・石英 褐色	



第77図 第27号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第77図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	地成・胎土・色調	備考
2	土師器	B 17.0(周)	胴部の破片である。胴部は底部からやや傾らみをもちながら外上方へ立ち上がる。	外面はへう削り、内面はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・燧 にふい橙色	
3	土師器	B 8.8(周) C 6.9	底部は平底である。胴部は底部から器厚を薄くしながら直線的に外上方へ立ち上がる。	底部はへう削り、胴部内外面共にへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・燧 灰褐色	
4	土師器	B 9.2(周) C 7.8(周)	底部は平底である。胴部は底部から内彎ぎみに外上方へ立ち上がる。	胴部内外面共にへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 灰褐色(外) 橙色(内)	

出土遺物解説表(第77図)

番号	器種	流量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	土師器 土師器	B 6.9cm C 6.9cm	底の胸下平の土師片である。胴部は底部から直線的に外上方へ立ち上がる。	胴部内外面共にへう張り後、へうナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・スコリア にふい掛色	
6	土師器 土師器	A 15.9cm B 6.1cm C 12.9cm	高杯の受器である。受部は胴部から内側がみに外側へ開きながら立ち上がった後、縁を有して外反して立ち上がる。	磨減がはげしく不明。	普通 細砂・長石 石英・スコリア 明赤褐色	内面の一部より朱塗りが見られる。
7	土師器 土師器	A 15.9cm B 5.2 C 12.0	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に縁を有し、長く外反して立ち上がる。	体部外面はへうによる横ナデ、底部外面はへう張り後、へうナデ整形、内面全体はへう磨き調整が施されている。	真好 砂粒・長石 石英・スコリア 褐色	
8	土師器 土師器	A 13.9cm B 4.3cm C 13.9cm	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に鋭い縁を有し、直線的に外上方へ立ち上がる。	体部外面から内部全体にかけてへう磨き調整、底部外面は横なへう磨きが施されている。	普通 細砂・長石 石英・スコリア にふい掛色	
9	土師器 土師器	A 10.8cm B 4.1cm C 10.1cm	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な縁を有し、直線的に外上方へ立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面はへうナデ、内面は横なへうナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい掛褐色	内外面朱塗り
10	土師器 土師器	A 13.5 B 5.1	底部は丸底でやや深い皿状を呈する。体部は底部からやや内側して立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面は多方向からのへう張り整形、内面はへう磨き調整が施されている。	真好 砂粒・長石・石英 明赤褐色	
11	磁石 石製品					

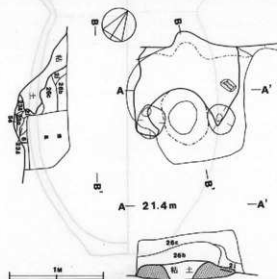
第28号住居跡(第74図)

本跡は住居跡の密集しているB3e₂・B3f₃を中心に確認され、第23号住居跡の東0.2mに位置し、北側で第25号住居跡と重複している。新旧関係は本跡の方が新しい。規模は本跡が調査区域外へ延びているため、南北の壁の長さは不明である。東西は長さ6.8mの大型の住居跡で、主軸方向はN-33.5°-Wである。壁高は約50cmでやや浅く、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められており、壁下には幅7~8cm、深さ5cmの小さな溝が周回している。また、ピットは5個確認され、P2・P3は直径30cmの円形を呈し、深さは63~87cmである。P4は竈西側から確認され、長径100cm・短径74cmの楕円形を呈し、深さは50cmほどである。遺物は上層から完形の長袋形土器(第79図-1)が横位の状態で出土し、その下から楕形土器(第80図-1)が破損した状態で出土している。

覆土は全体にローム粒子・焼土粒子・ロームブロックを含み柔らかく、色調は黒褐色を呈し、自然堆積の状態を示している。また、本住居跡は半分が調査区域外へ延びているため、調査区域との境の断面より、表土からの土層を観察することができた。これにより、本住居跡は現地表面より約35cm下のところから掘り込まれて構築されていることが判明した。

遺物は竈周辺および、西側壁下から多量の土師器・土製品を出土する。竈東側床面上から環形

土器(第80図-6・8),西側壁下から鉢形土器(第80図-4)が倒立した状態で,すぐ近くから



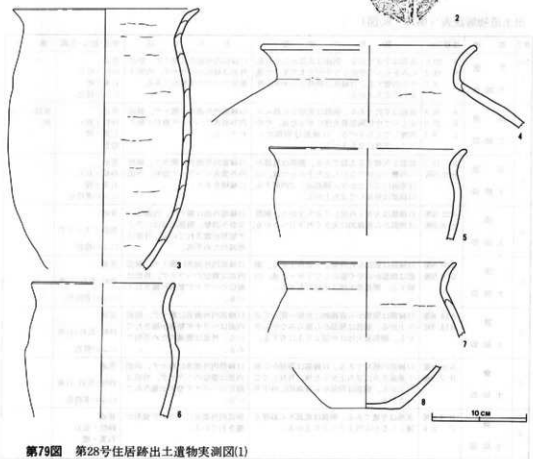
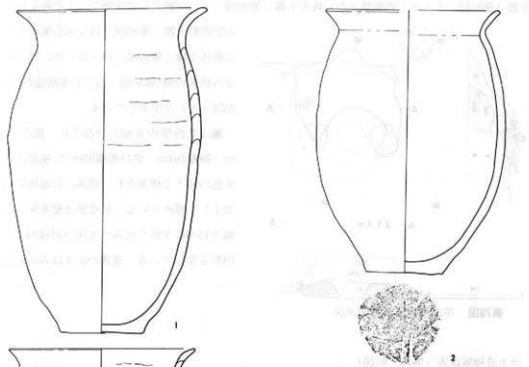
第78図 第28号住居跡竈実測図

小型壺形土器(第80図-11),同じ床面上から球状土釜(第80図-14~20)が,覆土中から鉄製の鎌(第80図-22)・石製模造品(第80図-21)が出土している。

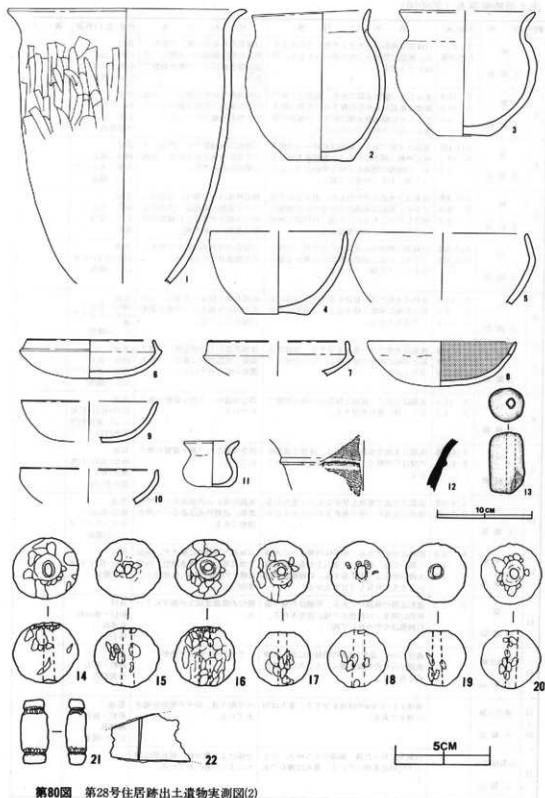
竈は北西壁中央部に付設され,長さ131cm・袖幅104cm・焚口部幅65cmで,袖部は黄灰色の粘土で構築され,前部には凝灰岩を加工して埋めている。焼成部は壁を50cmの幅で15cmほど掘り込み,火床は直径34cmの円形を呈している。遺物の出土はみられない。

出土遺物解説表(第79・80図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
79	長 壺 土器	A 20.0	底部は平底である。胴部は底部からやや振らみをもって中位よりやや上まで窄った後、やや内彎する。口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ, 胴部外面は縦位のヘラナデ, 内面は縦位のヘラナデ整形である。	普通 砂粒・長石 石英・礫 にふい・橙色	
		B 34.2				
		C 8.7				
2	長 壺 土器	A 16.8	底部は平底である。胴部は底部から振らみをもって中位胴部最大径に至った後、やや内彎して立ち上がる。口縁部は頸部から「く」字状に立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ, 胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・礫 橙色	底部に木炭痕
		B 27.9				
		C 8.1				
3	長 壺 土器	A 19.5	底部を欠損する土器である。胴部は底部から外側へ広がりがながら立ち上がった後、ほぼ垂直に立ち上がり、頸部近くで内彎する。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ, 胴部内外面共にヘラナデ整形, 内面に輪轆痕あり。	普通 砂粒・長石 石英・礫 にふい・黄褐色	
		B 27.50				
4	壺 土器	A 22.3	口縁部は大きく外反して立ち上がり, 胴部は頸部から直線的に大きく外下方へさがる。	口縁部外面は横ナデ, 内面はヘラナデ調整。胴部内面はヘラナデ整形が施されている。外面は磨滅のため不明。	普通 細砂・スコリア にふい・橙色	
		B 8.3				
5	壺 土器	A 20.8	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部は頸部からやや振らんで下がった後、内彎する。胴部最大径は上位に有する。	口縁部内外面共に横ナデ, 胴部内面は縦位のヘラナデ, 外面は縦位のヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい・黄褐色	
		B 9.5				
6	壺 土器	A 14.8	口縁部は頸部から直線的に外側へ開いて立ち上がる。胴部は頸部から振らみながらさがる。胴部最大径は中位より上に有する。	口縁部内外面共に横ナデ, 胴部内面はヘラナデ整形が施されている。外面は磨滅のため不明である。	普通 砂粒・長石・石英 にふい・橙色	
		B 14.3				
7	壺 土器	A 18.8	口縁部の破片である。口縁部は頸部から短く垂直に立ち上がった後、外反して立ち上がる。胴部は頸部から直線的に外下方へさがる。	口縁部内外面共に横ナデ, 胴部内面は縦位のヘラナデ, 外面は縦位のヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい・黄褐色	
		B 7.5				
8	壺 土器	B 4.8	底部は平底である。胴部は底部から器厚を薄くしながら外上方へ立ち上がる。	胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・礫 にふい・橙色	
		C 7.4				



第79图 第28号住居跡出土遺物実測図(1)



第80图 第28号住居跡出土遺物実測図(2)

出土遺物解説表(第80図)

番号	器名	法長(cm)	器形の特徴	製作技法	組成・胎土・色調	備考
1	土師器 碗	A 25.0 B 29.0	口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がり、頸部は頸部からやや内傾し、内傾して広がる。	口縁部内外面共に横ナゲ整形、頸部外面は縦位のへう削り、内面は横な縦位のへう削り調整である。	普通 砂粒・長石・石英・スコリア にふい褐色	
2	土師器 碗	A 12.6 B 16.0 C 6.9	底面をもつ変形土器である。底部は平底で、頸部は底部からやや内傾し、外側へ開きながら半位傾斜最大径に至る。口縁部は頸部からやや外反して立ち上がる。	口縁部内外面に横ナゲ、胴部内面は横位、外面は縦位のへう削り整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英・スコリア 浅黄褐色	
3	土師器 盃	A 14.4 B 13.1 C 5.2	底部は平底である。胴部は底部から内傾し、外側へ開きながら上位胴部最大径に至る。口縁部は頸部からゆるやかに立ち上がった後、大きく外反して開く。	口縁部内外面横ナゲ、内面へう削り整形が施されている。外面は増減のため不明。	普通 細砂・長石・石英・スコリア にふい褐色	
4	土師器 鉢	A 14.3 B 8.8 C 6.8	底部は中央部がやや内凹し、おむね平底である。胴部は底部からゆるやかに外側へ開きながら立ち上がった後、口唇部で垂直に立ち上がる。口唇部は尖る。	胴部外面はへう削り、内面はへう削り整形、底部は一方内からのへう削りである。口縁部内外面は増減のため不明。	普通 細砂・長石・石英・雲母 褐色	
5	土師器 埴輪	A 17.8 B 7.3	口縁部は頸部から直線的にやや長く内傾して立ち上がる。胴部は頸部からゆるやかに内傾し、内傾して広がる。	口縁部内外面に横ナゲ整形、その他増減のため不明。	普通 砂粒・長石・石英 にふい褐色	
6	土師器 埴輪	A 13.3 B 4.0 C 15.1	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、直線的に内傾して立ち上がる。	底部外面下位はへう削り、その他全体内外面共にへう削り調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英・スコリア にふい褐色	
7	土師器 埴輪	A 14.8 B 3.7 C 15.8	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、やや内傾して立ち上がる。	体部外面から内面全体へう削り調整、底部外面は横なへう削り調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英・スコリア にふい褐色	
8	土師器 埴輪	A 15.8 B 4.2	底部は丸底で、底部と体部との境は明瞭でなく、深い皿状を呈する。	器全体横なへう削り調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にふい黄褐色 黒色(内)	
9	土師器 埴輪	A 14.4 B 4.3	底部は丸底で皿状を呈する。体部と底部との境は不明瞭で、底部より連続的に立ち上がる。	器全体横なへう削り調整が施されている。	良好 砂粒・長石・石英 褐色(外) 黒灰色(内)	
10	土師器 埴輪	A 14.5 B 3.6	底部は丸底で皿状を呈するものと思われる。体部は底部から強く内傾し、内傾して立ち上がる。	体部外面から内面全体へう削り調整、底部外面は横なへう削り調整である。	普通 細砂・長石・石英・スコリア にふい褐色	
11	土製品 小型壺	A 5.6 B 4.9 C 3.7	底部は平底である。胴部は内傾し、外側へ開いた後、内傾して立ち上がる。胴部最大径は中位より下に有する。口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナゲ、胴部外面は横なへう削り調整、内面は横ナゲ整形である。底部はナゲ整形。	普通 細砂・長石・石英 浅黄褐色	
12	須恵器 壺	B 5.3	壺形土器の頸部片である。頸部は外側へ直線的に開き、口縁部との境に隆帯を作る。口縁部はやや外反して開く。	横位の横帯隆状文が施されている。	良好 砂粒・長石粒 石英粒 灰色	
13	土製品 管状土器		直径3.7cm、高さ6.4cmの円筒状に作られ中央部からやや外側に寄ったところに1個の孔を有する。	へう削り、横ナゲ整形	普通 砂粒・長石 浅黄褐色	
14 20	土製品 球状土器		直径3.1-3.4cmの球状を呈する。重さは26-34gである。	へう削り、横ナゲ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 黒褐色 にふい褐色	
21	石製機織品 石製品		円筒状に作った後、両端から5mm入ったところに括れを作っている。原石は燧石である。	全体によく磨かれ、括れ部は削りによって作られている。		

出土遺物解説表 (第80図)

期	器種	量量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
22	土製 鉄製品		罐の先端部である。			

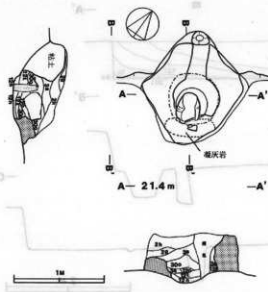
第29号住居跡 (第82図)

本跡は遺跡の中央やや東側、B2c₉・B2c₆を中心に確認され、北側で第24号住居跡と、南側で第27号住居跡と、北東部の一部で第3号土壌と重複している。いずれの住居跡よりも本跡の方が新しいが、第3号土壌との新旧は不明である。規模は長軸6.25m・短軸6.0mの隅九方形の平面形を呈し、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は65~67cmと非常に深く、第24号住居跡よりも約20cm、第27号住居跡よりも約15cm深く構築され、壁面は直線的に外側へ広がりながら立ち上がっている。壁下には幅10~15cm、深さ5~8cmの溝が全体に周回し、床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。ピットは6個確認され、P1~P4は長径30~40cmの楕円形および円形のピットで、深さは58~70cmである。柱間の距離は約3.6mで、いずれも主柱穴と考えられる。P6は竈東側から確認され、長径70cm・短径60cmの楕円形を呈し、深さは45cmで覆土は黒褐色で柔らかく、物を貯えるために作られた貯蔵穴である。P5は南壁下中央部に作られた「∩」形の高さ2cm、幅33~46cmの土手状の高まりをめぐる施設の内側に掘られ、平面形は長径50cm・短径30cmの楕円形を呈し、深さは21cmである。なお、半円状のベルト内にピットを有する住居跡は本跡のほか第10・16・20・22号住居跡の5軒である。

覆土は大きく3層からなり、上層が黒褐色、中層から下層が暗褐色の色調で、全体にローム粒子、焼土粒子などを含む柔らかい覆土で、堆積状態はレンズ状の自然堆積である。

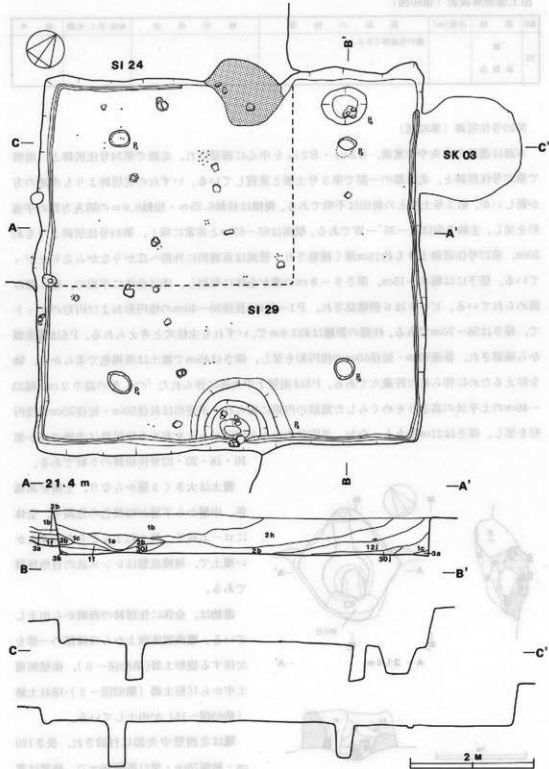
遺物は、全体に住居跡の西側から出土している。竈西側床面上から口縁部の一部を欠損する甕形土器(第83図-6)、南壁側覆土中から坏形土器(第83図-9)・球状土鉢(第83図-15)が出土している。

竈は北西壁中央部に付設され、長さ120cm・袖幅78cm・焚口部幅38cmで、袖部は黄灰色の粘土で構築されている。焚口部前部



第81図 第29号住居跡竈実測図

(图82) 第29号住居跡実測图

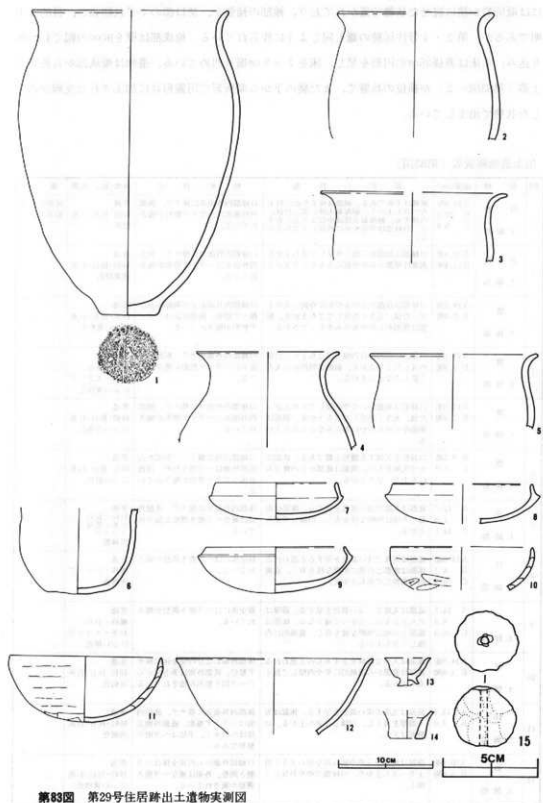


第82图 第29号住居跡実測图

には凝灰岩が横に寝せた状態で置かれており、袖部の補強か、焚口部のくずれ防止か、目的は不明であるが、第2・4号住居跡の竈も同じように作られている。焼成部は壁を90cmの幅で42cm掘り込み、火床は直径35cmの円形を呈し、床を7～9cm掘り凹めている。遺物は焼成部から長梨形土器(第83図-2)が横位の状態で、また竈の下から凝灰岩で円錐形状に加工された支脚が直立した状態で出土している。

出土遺物解説表(第83図)

番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	長 甕 土 師 器	A 20.60 B 32.0 C 5.8	底部は平底である。胴部はゆるやかに外上へ立ち上がり、胴部最大径に達した後、内傾する。胴部最大径は中位より上に存在する。口縁部はゆるやかに外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	底部に木炭塊有り。
2	長 甕 土 師 器	A 16.60 B 13.40	口縁部は頸部から短く外反して立ち上がる。胴部は頸部からやや膨らみをもってさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 淡黄褐色	
3	甕 土 師 器	A 19.50 B 7.40	口縁部は頸部からゆるやかに外側へ立ち上がった後、大きく外反して立ち上がる。胴部は頸部からやや膨らみをもってさがる。	口縁部内外面および胴部内面は横ナデ整形、胴部外面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 ふいふい黄褐色	
4	甕 土 師 器	A 15.10 B 9.90	口縁部は頸部から内傾して立ち上がった後、外反して立ち上がる。胴部は頸部から大きく膨らみながらさがる。	口縁部内外面横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英・スコリア ふいふい黄褐色	
5	甕 土 師 器	A 17.30 B 7.90	口縁部は頸部からやや内傾して立ち上がった後、大きく外反して立ち上がる。胴部は頸部からゆるやかに膨らみながら立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 ふいふい赤褐色	
6	甕 土 師 器	B 9.10 C 6.9	口縁部は欠損する整形土器である。底部はやや丸味をもつ。胴部は底部から内傾きみで外上方へ立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ、胴部から底部外面はヘラナデ整形。内面全体ヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 ふいふい褐色	
7	杯 土 師 器	A 12.7 B 4.0 C 14.1	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な線を有し、内傾して立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面は薄くヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英・赤褐色 スコリア 灰褐色	
8	杯 土 師 器	A 14.60 B 4.2 C 16.3	底部は丸底で浅い皿状を呈すると思われる。体部は底部との境に明瞭な線を有し、直線的に内傾して立ち上がる。	部全体にはヘラ磨き調整が施されている。	普通 細砂・スコリア 灰褐色	
9	杯 土 師 器	A 14.7 B 4.9 C 16.3	底部は丸底で、浅い皿状を呈する。器厚は立ち上がるにしたがって薄くなる。体部は底部との境に明瞭な線を有し、直線的に内傾して立ち上がる。	部全体にはヘラ磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英・スコリア ふいふい褐色	
10	杯 土 師 器	A 14.90 B 4.60	底部は丸底で皿状を呈するものと思われる。体部は底部から直線的にやや内傾して短く立ち上がる。	部全体にはヘラ磨き調整が施されている。体部外面および内面全体は横ナデ整形。底部外面は多方向からのヘラ磨き整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 灰褐色	
11	埴 土 師 器	A 15.9 B 7.0	底部は丸底で深い皿状を呈する。体部は短く器厚を厚くし、内傾して立ち上がる。口縁部は尖る。	体部内外面共に横ナデ、底部内面はヘラナデ整形。底部外面上位はヘラナデ、下位はヘラ磨き整形である。	普通 砂粒・長石・石英 灰褐色	
12	鉢 土 師 器	A 20.60 B 8.00	胴部は底部からやや膨らみながら大きく外上へ立ち上がり、口縁部でやや外反して開く。	口縁部外面から内面全体はヘラ磨き調整。外面は薄くヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 ふいふい黄褐色	



第83图 第29号住居跡出土遺物実測図

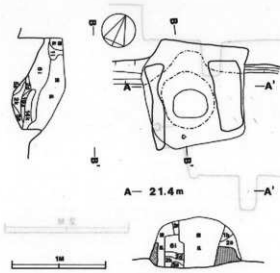
出土遺物解説表（第83図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
13	小型白付土師器	A 4.9 B 3.0 C 2.2	胴部は黄緑的に外上方へ立ち上がった後、口辺部で外反して開く。また、底部には「八」字状の台が作られている。	手揉ね土器。	普通 細砂・長石・石英 浅黄褐色	
14	小型瓶土師器	B 2.6 C 3.8	小型の瓶と思われる土器である。裏面からのるやかに外側へ開きながら外反して立ち上がる。上位は器厚を薄くする。	器内外共にヘラナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にふい黄褐色	
15	球状土師器		直径3.3cmの球状に作られ、中央部には直径4mmの孔が作られている。重さは80gである。	種なヘラナデ整形が施されている。二次焼成を受けている。	普通 砂粒 黒褐色	

第30号住居跡（第85図）

本跡は遺跡の東側、B3 a₄・B3 a₅を中心に確認され、南側で第31A号住居跡と重複している。本住居跡の方が新しい。また、北側では第32号住居跡と北東コーナー部で接している。規模は長軸4.45m・短軸4.3mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-23°-Wである。壁高は55~60cmで、壁面は垂直に立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められており、また壁下には幅8~12cm、深さ3~5cmの浅い溝が全体に周囲する。ピットは5個確認され、P1~P4は直径30~40cmの円形を呈し、深さは51~60cmである。柱間の距離は2.1mで、いずれのピットも主柱穴と思われる。P5はP3とP4の中間やや南側に確認され、直径35cm・深さ20cmと浅いピットで、入口の施設に使用されたピットかと思われる。

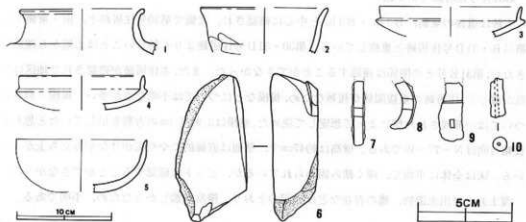
覆土は上層が農耕の攪乱を受け、中層から下層にかけて黒褐色の色調で、覆土中にはロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を含み柔らかく、おおむね自然堆積の状態を示している。



第84図 第30号住居跡竈実測図

遺物は非常に少なく、覆土中から土師器の破片と、鉄製の釘（第86図-7・8）、金具（第86図-9）、管状土鏝（第86図-10）が出土している。

竈は北北西壁中央部に付設され、長さ82cm・袖幅98cm・焚口部幅60cmで、西側の袖部はトレンチャーによって攪乱を受けているが、保存状態は良好で、粘土と凝灰岩によって構築されている。焼成部は壁を43cmの幅で15cmほど掘り込み、火床は長径35cmの楕円形を呈する。内部には赤褐色の焼土が堆積している。



第86図 第30号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第86図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 土器部	A 12.9匁 B 3.9匁	口縁部の破片である。口縁部は胴部から内傾して立ち上がった後、外反して立ち上がる。胴部は大きく開く。	口縁部内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色	
2	壺 土器部	A 13.4匁 B 4.9匁	口縁部は胴部から直線的に外上方へ立ち上がる。胴部は胴部からやや振らんで内傾する。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面はへら削り、内面は横位のへらナデ整形である。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色	
3	坏 土器部	A 15.1匁 B 3.3匁 C 15.9	底部は丸底で浅い皿状を呈すると思われる。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、垂直に立ち上がる。	体部内外面および底部内面は横ナデ整形。底部外面はへら削り後、縦なへらナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい褐色	
4	坏 土器部	A 13.3匁 B 3.7匁 C 14.0	底部は丸底で浅い皿状を呈すると思われる。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、垂直に立ち上がる。	体部内外面および底部内面は横ナデ整形。底部外面はへら削り後、縦なへらナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい赤褐色	
5	碗 土器部	A 13.8匁 B 5.6匁 C 5.0匁	底部は平底で胴部は器厚を薄くしながら外上方へ立ち上がり、口辺部でやや外反する。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英・スコリア 褐色	
6	砥石		3面に使用痕が認められる。原石は硬質砂岩である。			
7	釘		4~5mmの角柱状に作られた釘の先端部である。			
8	鉄製品					
9	金具 鉄製品		用途不明の金具である。長方形の孔があげられている。			
10	管状土埴 土製品		直径8mm、長さ2.1cmの円筒状に作られた土埴である。また中央部には1.5mmの孔があげられている。	指ナデ整形が施されている。	普通 砂粒 黒褐色	

第31A号住居跡（第5図）

本跡は遺跡の東側、B3 b₄・B3 b₅を中心に確認され、北側で第30号住居跡と、南・東側では第31B・31D号住居跡と重複している。第30・31D号住居跡よりも新しいことは上層から確認できたが、第31B号との関係は確認することができなかった。また、本住居跡が確認された地区は攪乱が激しく、住居跡の重複関係が複雑なため、規模などについては不明な点が多い。規模・形状については一部残された壁によって想定して決めた。規模は3.9×()mの方形を呈していたと思われる。長軸方向はN-7°-Wである。壁高は約47cmで、壁面は直線的にやや広がりながら立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められているが、ピットは確認することができなかった。

覆土および出土遺物、竈の存在などは前記のとおり、攪乱が激しかったため、不明である。

第31B号住居跡（第5図）

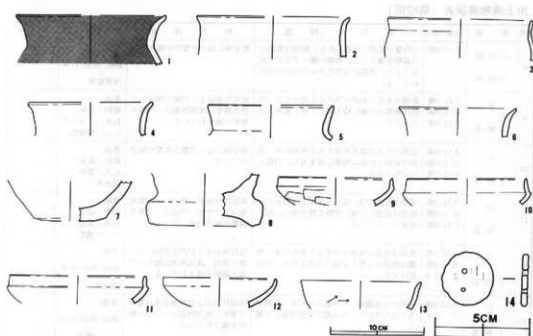
本跡は遺跡の東側、B3 b₅を中心に確認され、第31A・31C・31D号住居跡と重複し、本住居跡は第31D号住居跡よりは新しく、第31A・31C号住居跡との新旧関係は不明である。本跡も第31A号住居跡と同様に攪乱と重複が激しい地区のため、一部の壁の状態によりプランを想定した。そのため、規模は不明である。長軸方向はN-10°-Eである。壁高は約47cmで、壁面はゆるやかに外側へ広がりながら立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められていたが、ピットは確認することができなかった。

覆土および竈の存在などについては攪乱が激しかったため、不明である。

第31C号住居跡（第5図）

本跡は遺跡の東側、B3 b₅・B3 c₅を中心に確認され、第31A・31B・31D号住居跡とそれぞれ重複し、本住居跡は第31D号住居跡よりは新しく、第31A・31B号住居跡との新旧関係は不明である。本住居跡が確認された地区も第31A・31B号住居跡と同一地区のため、不明の点が非常に多い。規模は長軸4.45m・短軸4.4mの方形を呈しているものと考えられ、主軸方向はN-28.5°-Wである。壁高は約50cmで、壁面は垂直に立ち上がっており、床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。ピットは3個確認され、P1・P2は直径20~25cmの円形を呈し、深さはそれぞれ47・67cmで、2本とも主柱穴と考えられる。P3は北コーナー部から確認され、長径140cm・短径105cmの不整形円形を呈し、深さは59cmとやや深い。断面形は「∪」形状を呈し、貯蔵穴と思われる。またP3西側床面上から黄灰色の粘土の広がりが確認され、本住居跡の竈がこの場所に作られていたのではないかとと思われる。

覆土については第31A・31B号住居跡同様攪乱が激しいため不明である。



第87図 第31号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第87図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 15.8筒 B 5.2筒	口縁部の破片である。口縁部は頸部から外反して立ち上がり、胴部は頸部から外側へ開きながら上がる。	磨滅のため不明。	普通 砂粒・長石・石英 明赤褐色	胴部外面の一部に朱塗りが認められる。
2	甕 土師器	A 16.1筒 B 4.2筒	口縁部の破片である。口縁部は頸部から短く外反して開く。胴部は頸部から直線的にさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色	
3	埴 土師器	A 15.4筒 B 4.3筒	口縁部は頸部から直線的にやや開いて立ち上がる。胴部は頸部から膨らみをもってさがる。	器全体内外面にヘラ磨き整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄褐色	
4	甕 土師器	A 13.2筒 B 3.5筒	口縁部の破片である。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。	外面はヘラ磨き後、ナゲ整形。内面はヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい褐色	
5	甕 土師器	A 13.2筒 B 3.3筒	口縁部の破片である。口縁部は頸部から直線的に外側へ開いて立ち上がる。胴部は頸部から大きく開く。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	良好 砂粒・長石・石英 明褐色	
6	甕 土師器	A 12.5筒 B 3.1筒	口縁部の破片である。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。	口縁部外面はヘラナデ整形、内面はヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい褐色	
7	甕 土師器	B 4.6筒 C 7.5筒	底部はやや丸味をもっている。胴部は底部から内側よみに外側へ開いて立ち上がる。	器内外面共に横なへら磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 灰褐色	底部に本重痕有り。

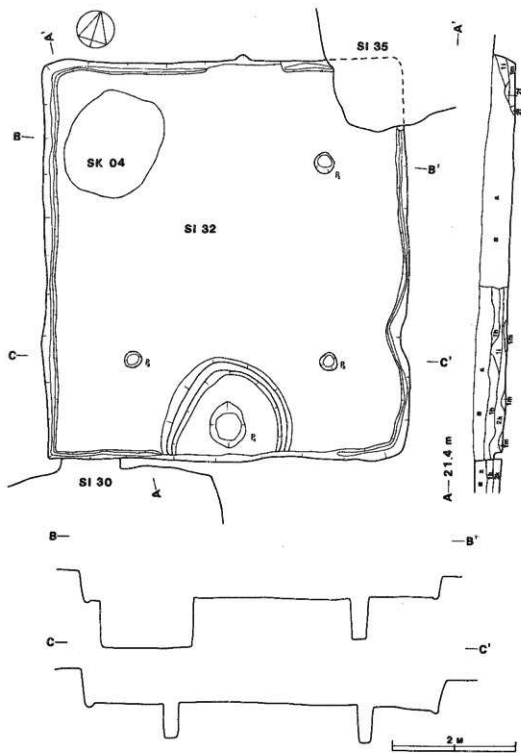
出土遺物解説表(第87図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
8	内付甕 土師器	B 5.50cm	古付甕の底部片と思われる。胴部は底部から器厚を薄くして、外側へ開いて立ち上がる。また、底部には高さ1cmの内が付けられている。	胴全体に指ナ字整形が施される。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄褐色	
9	埴 土師器	A12.00cm B 3.00cm C12.50cm	底部は丸底で皿状を呈すると思われる。体部は底部との境に明確な線を有し、短く垂直に立ち上がる。	体部外面および内面全体はへう磨き調整。底部外面はへう磨き整形が施されている。	普通 細砂・長石 石英・スコリア にふい黄褐色	
10	埴 土師器	A12.00cm B 2.90cm C13.00cm	底部は丸底で皿状を呈すると思われる。体部は底部との境に明確な線を有し、内傾して立ち上がる。	胴全体にはへう磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石 石英・雲母 褐灰色	
11	埴 土師器	A14.30cm B 2.40cm C14.90cm	底部は丸底で浅い皿状を呈すると思われる。体部は底部との境に明確な線を有し、短く垂直に立ち上がる。	体部内外面に横ナ字、底部外面はへうナナ字、内面はへう磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石 石英・雲母 にふい褐色	
12	埴 土師器	A12.10cm B 3.00cm C 11.9	底部は丸底で皿状を呈すると思われる。体部は底部から短く垂直に立ち上がり、口縁は突出する。	体部外面および内面全体はへう磨き調整。底部外面は短なへう磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 褐灰色	
13	埴 土師器	A12.00cm B 3.0	底部から連続的にやや振らみをもって外上方へ立ち上がり、口辺部でやや外反して開く。	体部外面および内面全体は横ナ字整形。底部外面はへう磨き整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい褐色	
14	双孔円板 石製品		直径2.7cm、厚さ3mmの円板状に作られ中央部からやや外側に2個の孔をあけている。原石は薄石である。	円形に加工を加え、両面および側面は丁寧に磨かれている。		

第32号住居跡(第88図)

本跡は遺跡の東側、B3i₄・B3i₅を中心に確認され、北東コーナー一部で第35号住居跡、住居跡内北西部で第4号土壇と重複し、本住居跡はいずれの遺構よりも古い。また、南側では第30号住居跡と接している。規模は本遺跡の中では大型の住居跡で、長軸6.42m・短軸5.9mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-14°-Wである。壁高は50~57cmで、壁面は直線的に外側へ広がりが立ち上がっており、壁下には幅10~15cm、深さ7~10cmの溝が全体に周回している。また、床は全体に平坦で、深さは59~71cmである。柱間の距離は約3.2mで、いずれのピットも主柱穴である。またP4はP2とP3の中間点よりやや南側に作られた「∩」形の高さ5cm、幅20~40cmの土手状の高まりをめぐらした施設内側に掘られ、平面形は長径70cm・短径60cmの楕円形を呈し、深さは42cmである。覆土の色調は黒褐色を呈し、全体にローム粒子などを含む柔らかい土であり、貯蔵穴として使用されたピットかと考えられる。なおP4と同じようなピットを有する住居跡は本跡を除いて、4軒確認されており、ほぼ同時期の住居跡と考えられる。

覆土は上層の約20cmが農耕による攪乱を受け、中層は黒褐色、下層が暗褐色の色調を呈し、全体にローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物を含み、とくに下層部には多量の炭化物が含まれていた。自然堆積と思われる。



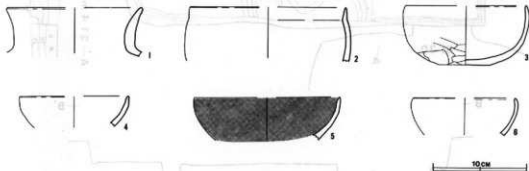
第88图 第32号住居跡実測図

遺物は覆土中から少量の土師器を出土したのみである。

竈は北北西壁のやや東側に付設された形跡はあるが、袖部などは確認することはできなく、一部壁外へ煙道が作られたと思われる部分を確認する。

出土遺物解説表(第89図)

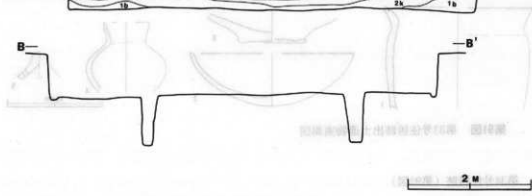
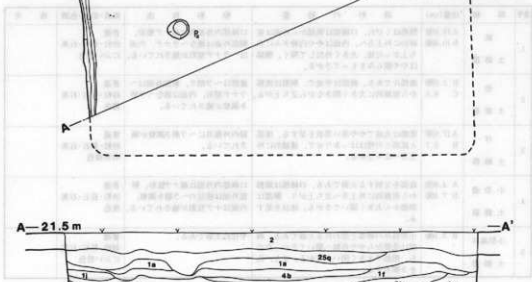
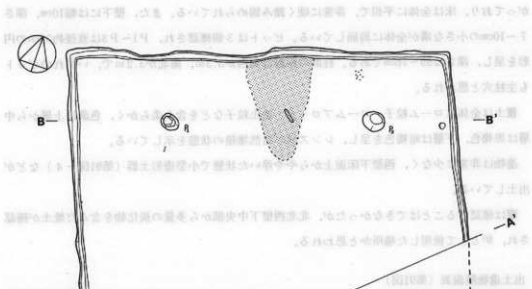
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 土師器	A 14.500 B 4.800	口縁部の破片である。口縁部は頸部から外反して立ち上がり、胴部は頸部から大きく開く。	口縁部内外面共に横ナテ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア 褐色	
2	甕 土師器	A 16.600 B 5.700	口縁部は頸部から短く、内面は直線的に、外面はやや張りをもって垂直に立ち上がる。胴部は頸部から張りをもって真下にさがる。	口縁部内外面共に横ナテ、胴部内外面共にへうナテ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
3	甕 土師器	A 13.000 B 6.3 C 5.5	底部は平底である。胴部は底部から大きく外上方へ開いた後、垂直に立ち上がる。口縁部は頸部から短くやや内傾する。	口縁部内外面横ナテ整形。胴部から底部外面はへう削り後、縁を磨き、内面は縁なへう磨き調整が施されている。	良好 細砂・長石・石英 明赤褐色(底部) にぶい赤褐色 (体部)	
4	坏 土師器	A 11.600 B 3.300	底部は先底でやや深い凹状を呈すると思われる。体部と底部との境ははっきりせず、底部から連続的にはほぼ垂直に立ち上がる。	器内外面共にへう磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
5	坏 土師器	A 15.500 B 4.600	底部は先底で深い凹状を呈すると思われる。体部と底部との境ははっきりせず、底部から連続的にはほぼ垂直に立ち上がる。	体部外面から内面全体はへう磨き調整。底部外面はへう削り整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 明赤褐色	内外面未塗り
6	坏 土師器	A 10.900 B 4.000	底部は先底で深い凹状を呈すると思われる。体部と底部との境ははっきりせず、連続的に内彎して立ち上がる。	器内外面共にへう磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	



第89図 第32号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡(第90図)

本跡は遺跡の東端、B3 a7・B3 b7 を中心に確認され、第34号住居跡の南2 m、第30号住居跡の東3 mに位置している。なお本住居跡の南側約1/3が調査区域外へ延びているため、全貌を明らかにすることはできなかった。規模は6.25×()mの方形を呈していたと考えられ、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は60~71cmで、本遺跡の住居跡の中では最も深い。壁面はほぼ垂直に立ち上



第90図 第33号住居跡実測図

がっており、床は全体に平坦で、非常に硬く踏み固められている。また、壁下には幅10cm、深さ7~10cmの小さな溝が全体に周回している。ピットは3個確認され、P1~P3は直径約30cmの円形を呈し、深さは59~76cmである。柱間の距離は東西が3.3m、南北が3.2mで、いずれのピットも主柱穴と思われる。

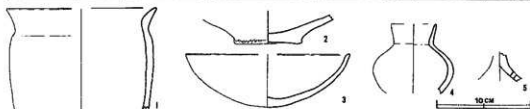
覆土は全体にローム粒子・ロームブロック・焼土粒子などを含み柔らかく、色調は上層から中層は黒褐色、下層は暗褐色を呈し、レンズ状の自然堆積の状態を示している。

遺物は非常に少なく、西壁下床面上からやや浮いた状態で小型壺形土器（第91図-4）などが出土している。

竈は確認することはできなかったが、北北西壁下中央部から多量の炭化物を含んだ焼土が確認され、炉として使用した場所かと思われる。

出土遺物解説表（第91図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	視感・胎土・色調	備考
1	瓶 上部器	A 16.0(胎) B 10.8(胎)	頸部はくびれ、口縁部は頸部から外面は直線的に外上方へ、内面はやや内彎ぎみに立ち上がった後、大きく外反して開く。胴部はやや膨らみをもってさがる。	口縁部内外面共に横ナテ整形。胴部外面は直なヘラナテ、内面はヘラナテ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい・褐色	
2	壺 土器器	B 2.6(胎) C 6.8	底部片である。腹部は平底で、胴部は底部から直線的に大きく開きながら立ち上がる。	底部はヘラ削り、胴部外面はヘラナテ整形、内面は直なヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
3	杯 土器器	A 17.6(胎) B 5.7	底部は丸底でやや深い皿状を呈する。胴部と底部との境ははっきりせず、直線的に外上方へ立ち上がる。	器内外面共にヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 明な褐色	
4	小型壺 土器器	A 4.8(胎) B 7.4(胎)	底部を欠損する土器である。口縁部は頸部から直線的に外上方へ立ち上がり、胴部は頸部から大きく開いてさがる。球状を呈する。	口縁部内外面は横ナテ整形。胴部外面は横白のヘラ磨き調整、内面はナテ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
5	小型高杯 土器器	B 3.1(胎)	小型高杯の胴部と思われる土器である。胴部は受皿からやや外側へ開いてさがるため、腹部で大きく開いてさがる。また、孔を3個有する。	平徑ね土器である。	普通 砂粒・長石・石英 にふい・褐色	



第91図 第33号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡（第92図）

本跡は遺跡の東端、A3h7・A3i7を中心に確認され、第35号住居跡の南1m、第32号住居跡の東3mに位置している。規模は本遺跡の住居跡の中では最大級で、一辺が7.6mの方形を呈し、

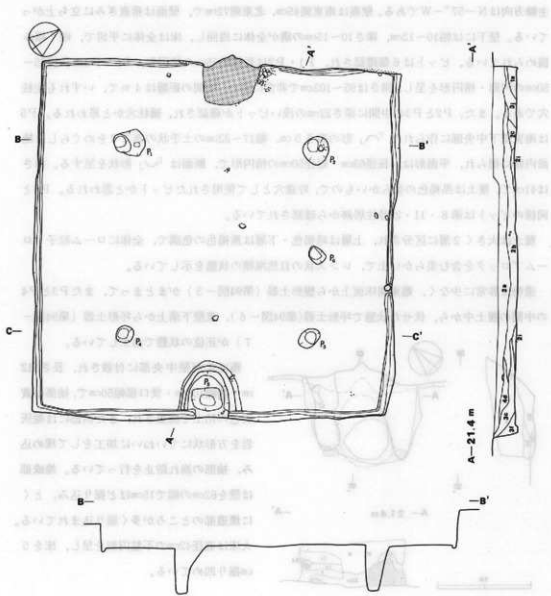
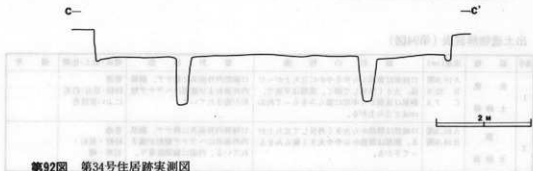


図34 第34号住居跡実測図



第92図 第34号住居跡実測図

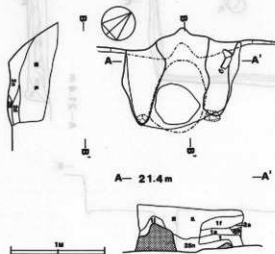
主軸方向はN-57°-Wである。壁高は南東側45cm、北東側72cmで、壁面は垂直直みに立ち上がっている。壁下には幅10~12cm、深さ10~15cmの溝が全体に周回し、床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。ピットは6個確認され、P1・P2は長径約65cmの楕円形、P3・P4は長径35~50cmの円形・楕円形を呈し、深さは95~102cmで非常に深い。柱間の距離は4mで、いずれも支柱穴である。また、P2とP3の中間に深さ22cmの浅いピットが確認され、補柱穴かと思われる。P5は南東壁下中央部に作られた「 \cap 」形の高さ5cm、幅17~32cmの土手状の高まりをめぐらした施設内側に掘られ、平面形は、長径63cm・短径50cmの楕円形で、断面は「 \cup 」形状を呈する。深さは41cmで、覆土は黒褐色の柔らかいもので、貯蔵穴として使用されたピットかと思われる。P5と同様のピットは第8・11・23号住居跡から確認されている。

覆土は大きく2層に区分され、上層は暗褐色・下層は黒褐色の色調で、全体にローム粒子・ロームブロックを含む柔らかい土で、レンズ状の自然堆積の状態を示している。

遺物は非常に少なく、竈東側床面上から甕形土器(第94図-3)がまとまって、またP3とP4の中間の覆土中から、伏せた状態で坏形土器(第94図-6)、東壁下溝上から坏形土器(第94図-

7)が正位の状態出土している。

竈は北西壁中央部に付設され、長さ112cm・袖幅103cm・焚口部幅50cmで、袖部は黄灰色の粘土で構築され、また前部には凝灰岩を方形状にいてねい加工をして埋め込み、袖部の崩れ防止を行っている。焼成部は壁を62cmの幅で15cmほど掘り込み、とくに煙道部のところが多く掘り込まれている。火床は直径42cmの不整円形を呈し、床を5cm掘り凹めている。

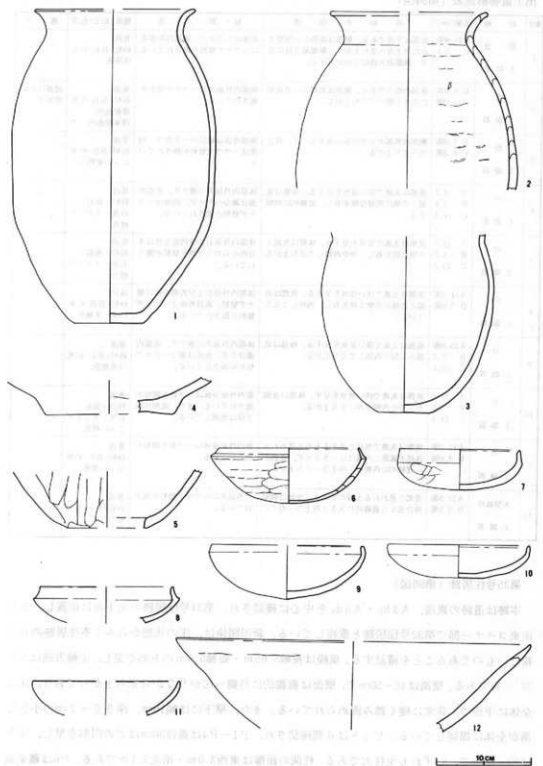


第93図 第34号住居跡竈実測図

出土遺物解説表(第94図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕形土器	A 15.6 B 32.8 C 7.4	口縁部は頸部からゆるやかに立ち上がった後、大きく外反して開く。底部は平底で、胴部は底部から中位に膨らみをもって約30cmほど立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面および底部はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色	
2	甕形土器	A 15.30 B 18.60	口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がる。胴部は頸部からやや大きく膨らみをもってさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。内面に輪轆痕有り。	普通 砂粒・長石・石英・礫 にぶい褐色	

图94 第34号住居跡出土物



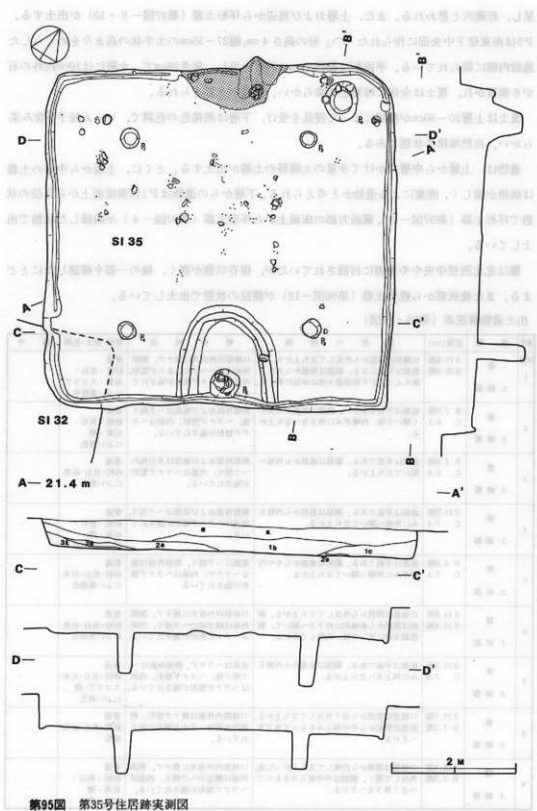
第94图 第34号住居跡出土物实测图

出土遺物解説表 (第94図)

番号	器種	質量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	鉢 土器器	B 16.8cm C 5.5	底部は平底である。胴部は底部から内寄どみに外上方へ立ち上がり、胴部最大径に至る。胴部最大径は上位に看する。	底部はヘラナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 灰褐色	
4	壺 土器器	B 3.9cm C 13.5cm	底部の破片である。胴部は底部から直線的に大きく開いて立ち上がる。	胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 黒褐色 淡黄褐色内	底部に木葉 痕有り
5	瓶 土器器	B 5.9cm C 8.3cm	胴部は底部からやや膨らみをもって、外上方へ立ち上がる。	胴部外面は縦位のヘラナデ、内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい黄褐色	
6	杯 土器器	A 14.7 B 5.8 C 16.3	底部は丸底で深い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な段を有し、直線的に内傾する。	体部内外面共に微ナデ、底部外面は異なるヘラナデ、内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英・スコリア 褐色	
7	杯 土器器	A 12.7 B 4.7 C 13.2	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は丸底との境に段を有し、やや内傾して立ち上がる。	体部内外面および内面全体は多方向からのヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英・スコリア 褐色	
8	杯 土器器	A 14.1cm B 3.9cm	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な段を有し、内傾して立ち上がる。	体部内外面および内面全体は横ナデ整形。底部外面はヘラナデ整形が施されている。	良好 砂粒・長石・石英 にふい赤褐色	
9	杯 土器器	A 15.9cm B 5.7 C 16.4	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部から短く内傾して立ち上がる。	体部内外面共に微ナデ、底部内面はナデ、外面は異なるヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 淡黄褐色	
10	杯 土器器	A 14.8 B 3.5 C 14.4	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部からやや内寄どみに立ち上がる。	器内外面全体はヘラナデ調整が施されている。また、底部外面下位は磨滅している。	普通 砂粒・長石・石英・スコリア にふい褐色	
11	杯 土器器	A 15.5cm B 3.6cm	底部は丸底で皿状を呈するものと思われる。体部と底部との境ははっきりせず、底部から連続的に内傾して外上方へ立ち上がる。	器内外面全体はヘラナデ調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい褐色	
12	大型高杯 土器器	A 37.5cm B 9.5cm	受部と思われる土器片である。受部は胴部接合部から直線的に大きく外上方へ開く。	内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	

第35号住居跡 (第95図)

本跡は遺跡の東端、A3h₅・A3d₆を中心に確認され、第34号住居跡の北1mに位置し、また南東コーナー一部で第32号住居跡と重複している。新旧関係は、床の状態からみて本住居跡の方が新しいものであることを確認する。規模は長軸5.65m・短軸5.6mの方形を呈し、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は48-50cmで、壁面は直線的に外側へ広がりながら立ち上がっており、床は全体に平坦で、非常に硬く踏み固められている。また、壁下には幅10cm、深さ5-7cmの小さな溝が全体に周囲している。ピットは6個確認され、P1-P4は直径30cmほどの円形を呈し、深さは59-80cmで、いずれも支柱穴である。柱間の距離は東西3.0m・南北3.1mである。P6は東東側から確認され、長径65cm・短径55cmの楕円形を呈し、深さは56cmである。断面形は「U」形状を



第95図 第35号住居跡実測図

呈し、貯蔵穴と思われる。また、上層および周辺から環形土器（第97図-9・10）が出土する。P5は南東壁下中央部に作られた「 \cap 」形の高さ4cm、幅27~35cmの土手状の高まりをめぐらした施設内側に掘られている。平面形は長径45cmの円形を呈し、深さ28cmで、土層には10cm内外の石が6個置かれ、覆土は全体に暗褐色で柔らかい。貯蔵穴と考えられる。

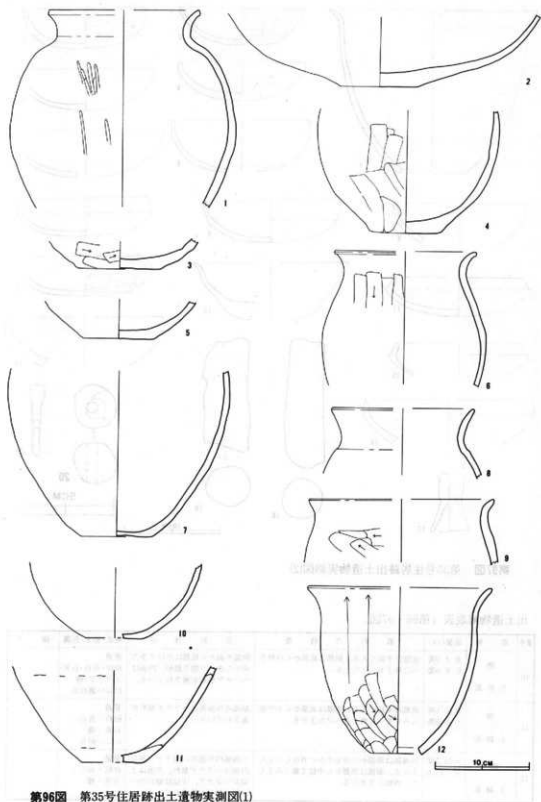
覆土は上層20~30cmが農耕によって攪乱を受け、下層は黒褐色の色調で、ローム粒子を含み柔らかい。自然堆積の状態である。

遺物は、上層から中層にかけて多量の土師器の土器が出土する。とくに、上層から中層の土器は破損が激しく、廃棄による遺物かと考えられる。下層からの遺物はP1西側床面上から正位の状態で環形土器（第97図-3）、竈前方部の床面上から環形土器（第97図-4）が破損した状態で出土している。

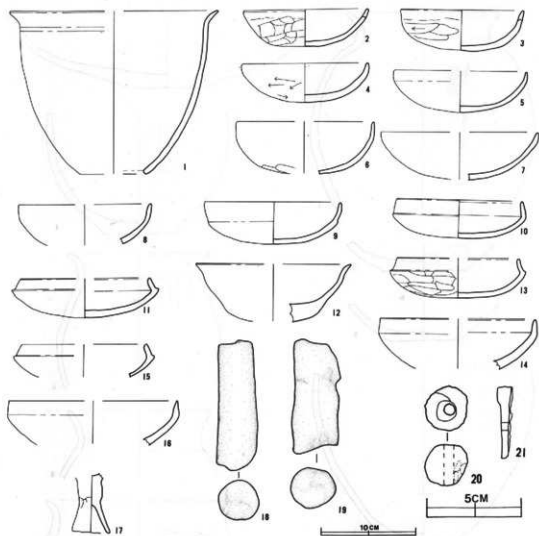
竈は北北西壁中央やや東側に付設されていたが、保存状態が悪く、袖の一部を確認したにとどまる。また焼成部から甔形土器（第96図-12）が横位の状態で出土している。

出土遺物解説表（第96・97図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
97図 1	壺 土師器	A 15.8cm B 20.9cm	口縁部は頸部から外反して立ち上がり、口唇部は平坦になる。胴部は頸部から大きく膨らんでさがり胴部最大径は中位に有する。	口縁部内外両面に横ナデ、胴部外面は縦いへうによるナデ整形、内面はへラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英・スコリアにふい黄褐色	
2	壺 土師器	B 7.7cm C 8.1	底部は平底で小さい。胴部は底部から大きく開いた後、内彎ぎみに外上方へ立ち上がる。	胴部外面および底部はへラ削り後、へラナデ整形、内面はへラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英・礫にふい黄褐色	
3	壺 土師器	B 2.9cm C 8.4	底部は平底である。胴部は底部から外側へ開いて立ち上がる。	胴部外面および底部は多方向のへラ削り、内面はへラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英にふい黄褐色	
4	甔 土師器	B 13.0cm C 7.4	底部は平底である。胴部は底部から内彎ぎみに外側へ開いて立ち上がる。	胴部外面および底部はへラ削り、内面はへラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英・礫にふい黄褐色	
5	甔 土師器	B 4.0cm C 7.4	底部は平底である。胴部は底部からやや内彎ぎみに外側へ開いて立ち上がる。	底部はへラ削り、胴部外面は薄なへラナデ、内面はへラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英にふい黄褐色	
6	甔 土師器	A 14.8cm B 14.4cm	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部は頸部から縦線的に外下方へ開いて、胴部最大径に至った後、内彎してさがる。	口縁部内外両面に横ナデ、胴部外面は縦方向のへラ削り、内面はへラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英にふい黄褐色	
7	甔 土師器	B 17.5cm C 7.5	底部は平底である。胴部は底部から内彎ぎみに外上方へ立ち上がる。	底部はへラナデ、胴部外面はへラ削り後、へラナデ整形、内面はへラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英・スコリア・礫にふい黄褐色	
8	甔 土師器	A 15.1cm B 7.1cm	口縁部は頸部から長く外反して立ち上がる。胴部は頸部からやや膨らみをもって外下方へさがる。	口縁部内外面に横ナデ整形、胴部内外面はへラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英にふい黄褐色	
9	甔 土師器	A 19.4cm B 6.7cm	口縁部は頸部から内彎して立ち上がった後、外反して開く。胴部はやや膨らみをもって小さく外下方へさがる。	口縁部内外両面に横ナデ、胴部外面は縦位のへラ削り、内面はへラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英・礫にふい黄褐色	



第96图 第35号住居跡出土遺物実測図(1)



第97図 第35号住居跡出土遺物実測図(2)

出土遺物解説表 (第96・97図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
10	鉢 土器器	B 8.00 C 6.00	底部は平底である。胴部は底部から内彎ぎみに外上方へ立ち上る。	胴部外面から底部にかけて多方向からのヘラ削り整形。内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英・ スコリア・礫 にふい黄褐色	
11	鉢 土器器	B 10.10 C 6.50	底部は平底である。胴部は底部からやや傾らみをもって外上方へ立ち上がる。	胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石英・礫 にふい褐色	
12	皿 土器器	A 19.50 B 17.6	口縁部は頸部からゆるやかに外反して立ち上がる。胴部は頸部から中位で膨らみもち、内傾してさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内面はヘラナデ整形。外面は上位がヘラナデ。下位は組位のヘラ削り整形が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石英・礫	

出土遺物解説表 (第96・97図)

番号	器種	法線(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	瓶 土師器	A 21.70 B 17.1 C 6.90	口縁部は頸部から直線的に大きく曲り立ち上がる。胴部は中位に膨らみを持ち、内傾してきがる。	口縁部内外面共に横ナゲ。胴部外面は緩なヘラナゲ整形。内面はヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア にふいば褐色	
2	環 土師器	A 12.9 B 3.9 C 4.2	底部は平底である。胴部は底部からゆるやかに外上方へ内磨きみに立ち上がる。口縁部は胴部から連続して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナゲ整形。内面全体へラナゲ整形。外面は多方向からのヘラ磨き整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふいば褐色	
3	環 土師器	A 12.9 B 4.5	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部から直線的にやや内傾して立ち上がる。	体部内外面および内面全体は横ナゲ整形。底部外面は横位のヘラ磨き整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
4	環 土師器	A 13.1 B 4.1	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部から連続的にやや内傾して立ち上がる。	底部外面は多方向からのヘラ磨き整形。口縁部内外面および内面全体へラ磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・ 石英・スコリア にふいば黄褐色	
5	環 土師器	A 14.00 B 4.4	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部から垂直に立ち上がる。	胴内外面共にヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア にふいば褐色	
6	環 土師器	A 14.50 B 5.50	底部は丸底で深い皿状を呈する。体部は底部からやや長く垂直に立ち上がる。	体部内外面共に横ナゲ整形。底部内面はヘラナゲ。外面はヘラ磨き後、上位にヘラナゲ整形を施している。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
7	環 土師器	A 16.60 B 5.10	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部から連続的に外上方へ立ち上がる。	体部内外面および内面全体へラ磨き調整。底部外面はヘラ磨き後、緩なヘラ磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英・ スコリア にふいば褐色	
8	環 土師器	A 14.00 B 4.20	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部から直線的に外側へ傾いて立ち上がる。	器全体にはヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
9	環 土師器	A 14.5 B 4.4 C 13.7	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な線を有し、内傾して立ち上がる。	器全体にはヘラ磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・ 石英・スコリア 灰褐色	
10	環 土師器	A 13.2 B 4.8 C 14.0	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な線を有し、直線的に内傾して立ち上がる。	体部内外面から内部全体はヘラ磨き調整が施されている。底部外面は磨滅のため不明。	普通 砂粒・長石・石英 にふいば黄褐色	
11	環 土師器	A 13.5 B 4.1 C 15.3	底部は丸底でやや浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な線を有し、直線的に内傾して立ち上がる。	体部内外面および内面全体はヘラ磨き調整。底部外面はヘラ磨き後、ヘラナゲ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 黒色	
12	瓶 土師器	A 15.40 B 6.10	底部は丸底状を呈し、胴部は底部から器厚を急に薄くして外上方へ立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がりながら内傾する。	口縁部内外面共に横ナゲ。胴部内面はヘラナゲ。外面は緩なヘラナゲ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 黄褐色	
13	環 土師器	A 12.90 B 4.2 C 14.3	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な線を有し、外反ぎみに内傾して立ち上がる。	体部内外面および内面全体へラ磨き調整。底部外面はヘラ磨き後、緩なヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふいば褐色	
14	環 土師器	A 16.80 B 5.30 C 15.7	底部は丸底で皿状を呈すると思われる。体部は底部から器厚を薄くして垂直に立つ。口縁部はやや内傾する。	体部内外面および内面全体へラ磨き調整。底部外面はヘラ磨き後、緩なヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
15	環 土師器	A 13.00 B 3.40	底部は丸底で浅い皿状を呈すると思われる。体部は底部との境に明瞭な線を有し、直線的に内傾して立ち上がる。	底部外面から内部全体はヘラ磨き調整。底部外面はヘラ磨き後、緩なヘラナゲ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にふいば褐色	

出土遺物解説表（第96・97図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
16	坏 土器器	A 17.6mm B 4.7mm	底部は丸底でやや深い皿状を呈するものと思われる。体部は底部から器厚を薄くして漸直に立つ。口部部は尖る。	器全体にはへう磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
17	高坏 土器器	B 5.9mm C 3.9	脚部は受部の接合部から柱状にさがった後、直線的に開いてさがる。	手捏ね上器。脚部上位外面に指痕あり。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
18	支脚 土製品		円筒状に作られた支脚である。	へう磨り後、丁寧なナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい黄褐色	
19	支脚 土製品		円筒状に作られた支脚である。	へう磨り後、指ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい黄褐色	
20	球状土練 土製品		直径2.5cmの球状に作られ、中央部には直径5mmの孔があげられている。重さは20gである。	へう磨り後、指ナデ整形が施されている。	普通 砂粒 黒褐色	
21	釘 鉄製品		頭は7mm、先は4mmの角柱に作られた釘である。			

(2) 土壌

本遺跡から確認された土壌は8基にのぼり、遺跡全体から分散して確認され、すべての土壌が住居跡と重複している点から、時期は弥生時代後期から古墳時代後期にかけての土壌である。形状は円形を呈する土壌が7基、楕円形を呈する土壌が1基である。遺物は非常に少ない。

第1号土壌（第98図）

本土壌はC2 b₄から確認され、第7号住居跡の北東コーナーで重複している。新旧関係は、住居跡を掘り込んだ後に確認したため不明である。規模は直径1.25mで円形を呈し、壁高は44cmで、第7号住居跡の床よりも12cmほど深い。壁面はゆるやかに外側へ広がりながら立ち上がっており、底面は平坦である。覆土は全体にローム粒子・焼土粒子を含み、色調は黒褐色・暗褐色を示す。自然堆積の状態を示している。出土遺物はない。

第2号土壌（第98図）

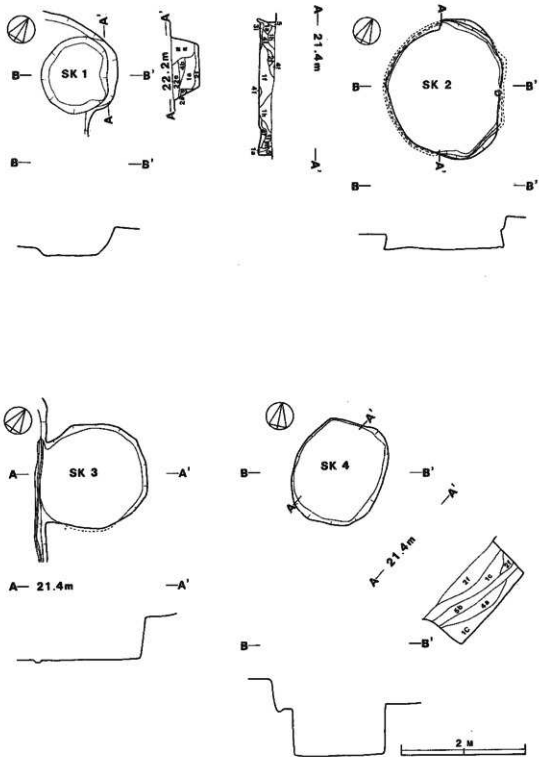
本土壌はB2 d₁・B2 d₂を中心に確認され、弥生時代の住居跡（第26号）を切って作られ、北側で第27号住居跡と接している。規模は長径2.2m・短径2.0mで円形状を呈し、長軸方向はN-75°-Wである。壁高は54cmで、第26号住居跡の床を約20cmほど掘り込んでいる。底面の周囲には幅5-10cm・深さ5cmほどの小さな溝が周回する。壁面は底面から3-5cmほどオーバーハングして内側へ傾きながら立ち上がっている。底面は平坦である。覆土はローム粒子を多量含み柔らかく、色調は黒褐色・暗褐色を示し、おおむね自然流入の状態で堆積している。遺物は東側壁上層から環形土器（第100図-1）がほぼ完形で出土している。

第3号土壌（第98図）

本土壌はB2 b₆から確認され、第29号住居跡と北東壁で重複し、本土壌の方が新しい。規模は直径1.8mで円形を呈し、壁高は70cmほどで、第29号住居跡とほぼ同レベルである。壁面は直線的にやや外側へ広がりながら立ち上がっており、底面は平坦である。覆土はローム粒子・ロームブロックを含み柔らかい。出土遺物はない。

第4号土壌（第98図）

本土壌は遺跡の東側、A3 i₄から確認され、第32号住居跡の北西側の床を切って作られている。規模は長径1.7m・短径1.45mの楕円形を呈し、長軸方向はN-14°-Eである。壁高は125cmで、他の土壌と比較して非常に深い。壁面は垂直に立ち上がっており、底面は平坦である。覆土はロー



第98图 第1·2·3·4号土坑实测图

ム粒子・焼土粒子を含み、色調は暗褐色・黒褐色・黒色を呈し、自然堆積の状態を示している。
遺物は、覆土中から壺形土器（100図-2）などの土師器の破片が少量出土している。

第5号土壌（第99図）

本土壌は遺跡のやや東側、B3e₂を中心に確認され、第25号住居跡内北側床面下から検出する。規模は長径1.65m・短径1.4mの楕円形を呈し、長軸方向はN-8°-Wである。壁高は58cmで、第25号住居跡の床を35cmほど掘り込んでいる。壁面は底面から直線的に内側へ傾いて立ち上がっており、底面は平坦である。覆土はレンズ状の自然堆積を示し、全体にローム粒子・ロームブロックを含み、色調は上層が暗褐色、中層から下層が黒褐色を示している。

遺物は、覆土中から甕形土器（第100図-3）、坏形土器（第100図-4）など土師器の破片が少量出土している。

第6号土壌（第99図）

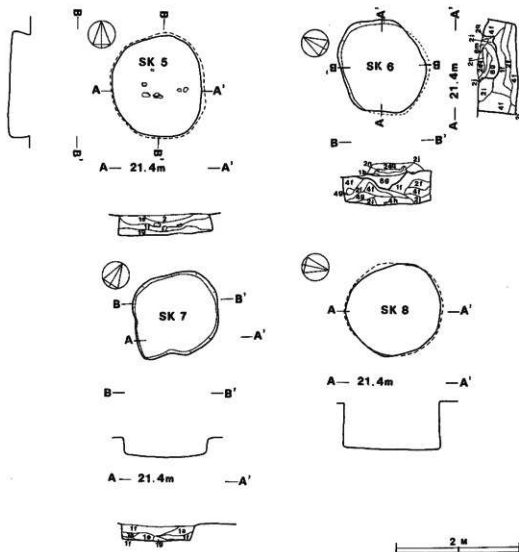
本土壌は遺跡の中央部、B2g₇・B2g₈を中心に確認され、第17号住居跡の竈下に位置している。規模は長径1.55m・短径1.3mの楕円形を呈し、長軸方向はN-38°-Wである。壁高は62cmほどで、壁面は垂直に立ち上がっているが、南西側に3~5cmほどオーバーハングする壁がみられる。底面は平坦であり、また覆土の色調は暗褐色・黒褐色を呈し、全体にローム粒子・ロームブロックを含み柔らかく、自然堆積の状態を示している。出土遺物はない。

第7号土壌（第99図）

本土壌は遺跡の西側、C1a₇・C1a₈を中心に確認され、第5号住居跡の中央よりやや西側の床面下から検出する。規模は直径1.45mの不整形円形を呈し、壁高は第5号住居跡の床面から30cmである。壁面はゆるやかに外側へ広がりながら立ち上がっており、床面はやや浅い皿状を呈す。覆土にはローム粒子・ロームブロックが含まれ、色調は全体に黒褐色でやや硬い。自然堆積の状態を示している。出土遺物はない。

第8号土壌（第99図）

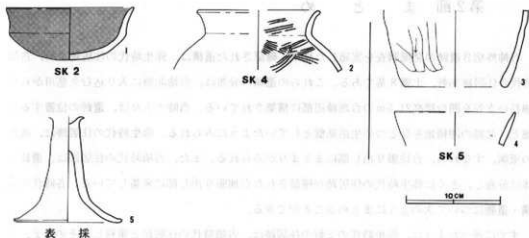
本土壌は遺跡の西端、C1e₈・C1f₈を中心に確認され、第1号住居跡の竈北側に接している。規模は長径1.5m・短径1.45mの円形を呈し、長軸方向はN-12°-Wである。壁高は75cmほどで、壁面は底面から約4cmオーバーハングしながら立ち上がった後、中位から垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平坦であり、覆土にはローム粒子・ロームブロックが含まれ柔らかく、色調は黒褐色・暗褐色を呈し、自然堆積の状態を示している。出土遺物はない。



第99図 第5・6・7・8号土坑実測図

出土遺物解説表 (第100図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	製形技法	焼成・胎土・色調	備考
SK 2 1	坏 土師器	A 13.4 B 5.6 C 12.3	底部は丸底で深状を呈する。体部は底毎の境に襷を有し、外反して長く立ち上がる。	体部内外面および底部内面はヘラ磨き、底部外面は鍍金ヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石灰・スコリア が褐色胎 土に黄褐色内	内外面朱塗 り
SK 4 2	壺 土師器	A 12.8(筒) B 6.3(筒)	口縁部は頸部から外反ぎみに立ち上がる。胴部は頸部から大きく張り出してきた。	口縁部内外面に横ナデ整形。胴部内外面にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 黄褐色	
SK 5 3	甕 土師器	B 8.1(筒) C 10.7(筒)	胴部は底部からやや膨らみをもって外上方へ立ち上がる。底唇部は丸味をもつ。	胴部外面は縦方向のヘラ磨り、内面はヘラナデ整形。また胴部外面下位は横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 に黄褐色	



第100図 第2・4・5号土坑，表採出土遺物実測図

出土遺物解説表（第100図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SK 5	環	A 12.7cm B 3.6cm	口縁部の破片である。口縁部は頸部から直線的に外上方へ立ち上がる。	外面は轆ナデ，内面はヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
表層 4	土師器					
表層 5	高環	B 11.1cm C 11.5	高環の胴部である。胴部は底部からやや開きどみにさがつた後，裾部で大きく開く。	器外面はヘラ磨き調整，内面はヘケナデ整形，裾部は内外面共に轆ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 褐色	
	土師器					

第2節 ま と め

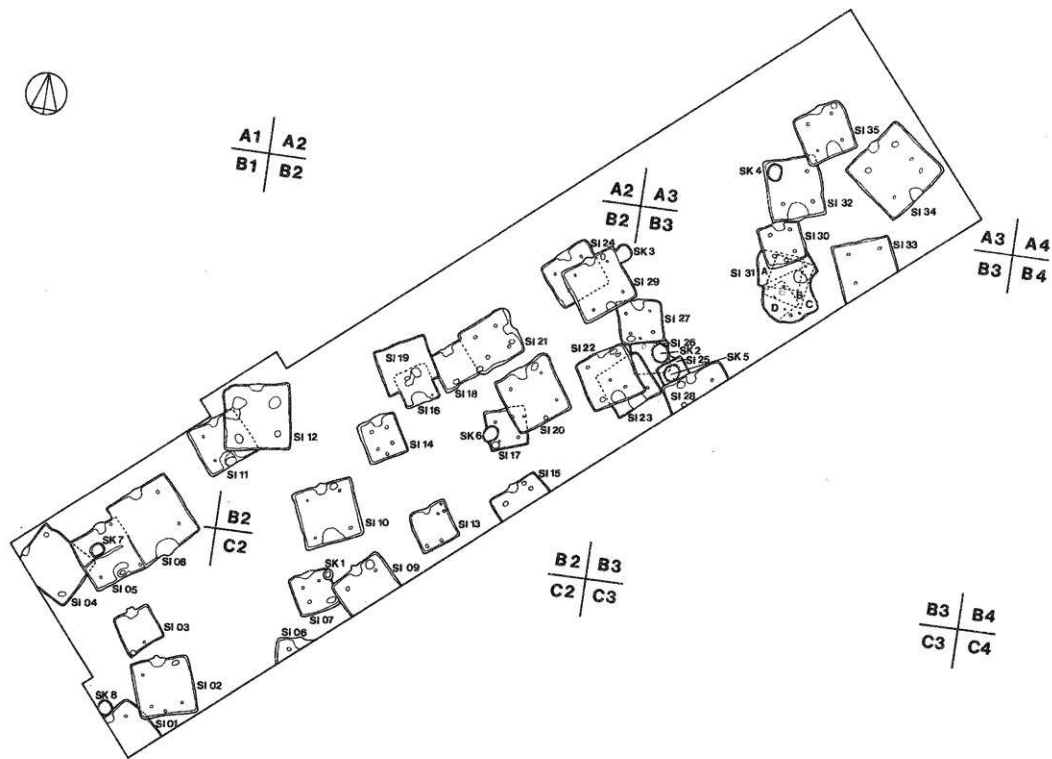
石神外宿B遺跡の発掘調査を実施した結果、確認された遺構は、弥生時代の住居跡2軒、古墳時代の住居跡36軒、土壇8基である。これらの遺構の分布は、台地北側に入り込む久慈川からの細長い支谷を囲む標高21.5mの台地縁辺部に構築されている。当時の人々は、遺跡の位置する台地と、北側の沖積地をひとつの生活基盤としていたようにみられる。弥生時代の住居跡は、遺跡の東側、すなわち、台地張り出し部にまとまりがみられる。また、古墳時代の住居跡は、遺跡全体に分布し、とくに弥生時代の住居跡が確認された台地張り出し部に密集している。各時代の遺構・遺物について次のようにまとめることができる。

すでに述べたように、弥生時代の2軒の住居跡は、古墳時代の住居跡と重複し、そのうえ、本遺跡全体が畑であり、農耕による擾乱がはげしかったために、遺構平面を完全な形で確認することは不可能であった。壁の一部が残されていた第26号住居跡は、隅丸方形を呈していたものと思われる。2軒の住居跡の内容を詳細に検討してみると、古墳時代の住居跡よりも浅く構築され、炉跡は住居跡の中央部やや北側に、床を約5cm張り凹め楕円形状に作られている。床は硬く踏み固められているが、柱穴の存在を確認することはできなかった。しかし、床・炉の状態などから居住期間は長期間であったろうと推察することができる。

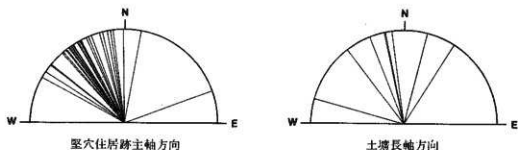
集落構成については、前述したとおり確認した住居跡が2軒だけのため不可能であったが、調査区域の幅が狭かったことなどを考慮したとき、南側調査区域外へ住居跡が延びていることは十分考えられ、今後の調査によって明らかになると思われる。

また、出土遺物は弥生土器少量および土製品の紡錘車1個である。なお、第31D号住居跡から出土した長頸壺形土器（第6図-1）は埋設された土器と考えられる。土器は胴下半を欠損し、口縁部を床にはほぼ水平に埋設している。縄文時代中期から後期にかけてよくみられる埋壺と類似しているけれども、埋設位置に違いがみられ、すなわち、縄文時代の場合は壁近くに、第31D号住居跡の場合は炉近くに埋設されている。位置が違うということは埋設土器のもつ性格の違いと考えられる。第31D号住居跡の場合は炉近くに埋設しているため、貯蔵を目的とする土器と考えたが、底部欠損している土器のため疑問を感じる。

土器の文様について分類すると、大きく2類に分類することができる。Ⅰ類は櫛描文系の土器、Ⅱ類は縄文を主体にした土器である。Ⅰ類に属する土器は出土土器の90%以上を占め、土器の文様構成は、口縁部と頸部との境を3～4本の隆起帯によって区画し、胴部は附加条一・二種による羽状縄文、または縄文が施されている。また、口唇部には縄文原体による押圧がなされている。口縁部の文様は無文のもの（第6図-1・第3図-4）、櫛描波状文のもの（第6図-2・第3図-2・5・6）があり、頸部はすべて4本帯による縦位の櫛描文によって、土器円周を5区割



第101圖 石神外宿B遺跡遺構配置圖



第102図 遺構主軸および長軸方向図

し、区割された間に櫛掃波状文を施している。また、II類の文様構成は、器全体に附加条二種の羽状縄文（第3図-1）と、口縁部と頸部との境を2本の隆起帯によって区画し、口縁部を無文、頸部には附加条一種の縄文を施している。

弥生時代に位置づけられた2軒の住居跡は、壺形土器の頸部などに十王台式土器の特徴が示されていることから、弥生時代後半に位置づけられるものである。

古墳時代に位置づけられる住居跡は、遺跡全体の台地縁辺部から集中して確認された。地形の上から推測するならば、両側の調査区域外へ住居跡が延びていると充分考えられ、本遺跡周辺には、古墳時代の大集落が形成されていたものと思われる。

住居跡の平面分布状態を見ると、遺跡の両端部と、中央部の3グループに分けることができる。しかし、あくまでも平面分布だけであるため、遺物と住居跡の新旧関係から集落構成を分類することにする。遺物の器種の中で、もっとも多く出土し、しかも器形に特色をもつ環形土器を下記のような観点から分類した。

A群……器高が低く、底部と体部との境に明瞭な稜を有し、体部は短く内傾する。

B群……底部と体部の境に稜を有し、体部は垂直またはやや長く外反して立ち上がっている。

C群……底部は丸底で、底部から連続的に外側へ開きぎみに立ち上がっている。いわゆる、碗状を呈する。

以上のように分類し、床面上の遺物からみると、A群のみ出土する住居跡は、第2・13・15・34号住居跡、B群のみを出土する住居跡は第4・7・8・11・16・21号住居跡、C群のみを出土する住居跡は第9・24・28号住居跡である。また、A・B群を共伴して出土する住居跡は、第17・22・35号住居跡、B・C群を共伴して出土する住居跡は、第23号住居跡のみである。A・C群を共伴する住居跡はない。さらに、第7・9号住居跡の新旧関係は、土層の切り合いからみて、第7号住居跡が古い住居跡である。すなわちB群の土器はC群より古い。また、第22・23号住居跡

の重複関係から、B・C群よりA群の土器が新しいことが明らかになった。以上のことから、環形土器の編年は、B→C→Aの順である。この編年に基づいて住居跡を古い順に分類することにする。

I期に属する住居跡は、第19・32・33号住居跡の3軒である。住居跡は中央部と東側の2グループに分けられ、その間の距離は約38mである。規模は最大の住居跡で、6.42×5.9mであり、やや大型の住居跡である。第33号住居跡は調査区域外へ延びているため不明であるが、他の2軒の平面形は長方形を呈する。なお、竈の存在が不明確であるなど、他期の住居跡と異なりを有する。また、第32号住居跡の南壁下中央部には、「 \cap 」形の土手状のものが作られ、内部に貯蔵穴を有する。その他の2軒にはみられない。

II期に属する住居跡は、第18・27号住居跡の2軒である。2軒とも遺跡のほぼ中央部に位置し、住居跡間の距離は、約15mである。同一グループに属するものと考えられる。規模は一辺の長さが4.2~4.6mで、やや小型住居跡群である。また、いずれの住居跡も南西のコーナー部に貯蔵穴を有している。

III期に属する住居跡は、第4・7・8・11・16・21・25号住居跡の7軒であるけれども、他に第1号住居跡が考えられる。これは第2号住居跡(IV期)よりも古く、覆土中の遺物からみると、III期の範ちゅうに入るものと考えられる。

III期の住居跡の数はI・II期よりも増加し、2~3軒を単位に構成された住居跡群が大きく3グループに分かれている。規模は、第8号住居跡が最も大型で、7.25×7.1mであり、小型のものは、一辺が3.1mの第25号住居跡である。グループから考えたとき、3軒で構成された住居跡群については、2軒の小型の住居跡の中に、大型の住居跡を1軒含んで構成されていることを把握することができる。

また、住居跡に付設されている竈は、ほとんど谷へ向かった北壁中央部に付設されているけれども、第21号住居跡だけが北東壁に付設され、さらに、構築に凝灰岩を使用して作られた異質の竈のため、何らかの意味をもつものと思われる。「 \cap 」形を呈する土手を築いているものは、第5・8・11号住居跡の3軒で、いずれも、内側に大きな貯蔵穴を有している。

IV期に属する住居跡は、第9・23・24・28号住居跡の4軒であるけれども、第3・5・12号住居跡は、住居跡の重複関係および覆土中の遺物から、IV期の範ちゅうに入るものと考えられる。平面的な分布状態をみると、遺跡の東側に2グループ、中央部に1グループの3グループが存在する。単位住居跡構成は、南北に並び、それぞれ大型の住居跡を含んだ2~3軒によって構成された住居跡群と考えられる。しかしながら、中央部に位置する第23・28号住居跡は、余りにも接近しているため、同時期としてとらえるのはやや疑問が残る。なお、この期における最大の住居跡は、第12号住居跡である。この住居跡の主柱穴は他の住居跡と違い、掘方の平面形は非常に大きく、深く掘られている。このように各グループの中に大型の住居跡が存在することは、当時す

で、指導的地位、あるいは、貧富の差によって住居跡の規模に変化が生じていたと考えられる。

住居跡内部の施設についてみると、貯蔵穴を有する住居跡は第9・23・28号住居跡の3軒である。しかし、いずれも位置が異なり、第23号住居跡は「 \cap 」形の土手内に作られ、第9・28号住居跡は竈の東および西側に有している。また、竈に凝灰岩を使用して構築している住居跡は、第3・5・9・28号住居跡の4軒である。

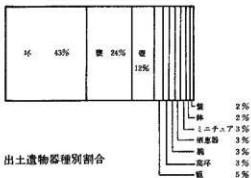
V期に属する住居跡は、第2・13・15・17・22・34・35号住居跡の7軒である。しかし、床面上からの決定資料がない住居跡、すなわち、第6・10・14・29・30号住居跡についても、覆土中の遺物により検討し、少なくともⅣ期以前にはさかのぼらないものと判断し、V期の範ちゅうの住居跡群としてとらえた。平面分布をみると、ほぼ遺跡全体に広がり、2～4軒で構成された住居跡群が、4グループ考えられる。1グループの住居跡構成は、やや大型の住居跡を2軒、小型のものが1～2軒で構成されていたものと考えられる。また、遺跡の西側のグループに属する第34号住居跡は、一辺が7.6mの方形を呈し、本遺跡の住居跡の中では最大級の規模を有している。

住居跡内部の施設をみると、第17号住居跡の竈は、他の住居跡と異なった方向、すなわち、北東壁に付設され、しかも、須恵器の提瓶がほぼ完形の状態で床面上から出土している点など、他の住居跡との違いがみられ、本遺跡の中ではとくに注目しなければならない点と考えられる。また、「 \cap 」形の土手を南壁下にめぐらしている住居跡は第10・34・35号住居跡の3軒で、そのうち第34・35号住居跡はその内側に貯蔵穴を有している。

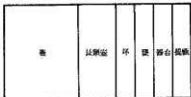
貯蔵穴の作られた位置は、前述した2軒の他に、竈右側に作られている住居跡が、第2・10・15・22・29号住居跡の5軒、竈左側に作られているものは第17号住居跡の1軒である。なお、竈右側に作られている例がⅠ～Ⅵ期の住居跡群の中でV期に最も多いことはこの時代の特徴ともいえる。

Ⅵ期に属する住居跡は、第20号住居跡の1軒のみである。この住居跡は、西側にV期に位置づけられる第17号住居跡を切って構築された住居跡であり、本遺跡の中では最も新しい住居跡である。内部施設をみると、南側壁下に「 \cap 」形の土手をめぐらし、その内側にピットを有する。また、貯蔵穴は竈右側に作られている。

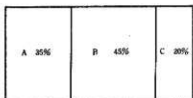
以上、古墳時代に位置づけられる住居跡群を、土器によって6期に分類してみたが、住居跡内部施設などには各時期の一定の傾向はみられなかった。住居跡構成および、住居跡内部施設の変遷を考えると、Ⅰ期において竈の存在は不明瞭であるが、それ以後になるとすべての住居跡に付設されている。また、南側壁下に「 \cap 」形の土手をめぐらしている住居跡は全期にわたってみられ、本遺跡に限って言えば、Ⅰ期から始まり、Ⅲ～Ⅴ期に多く用いられたものと考えられ、さらに、その内側に貯蔵穴を作るようになった時期はⅣ期で発生し、その後もこの傾向が続く。竈構築に使用した物をみると、Ⅰ・Ⅱ期までは粘土で作っていたものが、Ⅲ期になると、凝灰岩



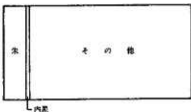
出土遺物種別割合



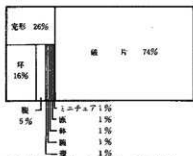
須恵器種別割合



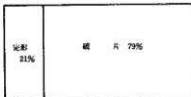
土師器環形土器分類



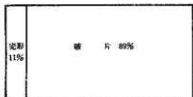
土師器、環形土器朱塗、内黒の割合



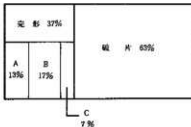
出土遺物完形および破片の出土率



土師器壺形土器完形および破片の出土率



土師器壺形土器完形および破片の出土率



土師器環形土器完形および破片の出土率

第103図 出土土器統計表

を袖部前部に使用する竈が発生し、Ⅳ・Ⅴ期にかけて多くみられるようになる。また、住居跡構成について考えてみると、Ⅳ～Ⅴ期の場合、1グループは3～4軒で構成され、中には必ず大型の住居跡を含んでいることが判明し、一般的傾向を示していると考えられる。また、火災に遭遇している住居跡は、Ⅲ期に所属する住居跡に多く、さらに、竈焼成部から使用している状態のまま土器が多く出土している時期は、Ⅲ・Ⅳ期に多くみられる。しかし、Ⅴ期の住居跡からは前述のようなことは確認されていない。この差を生じた理由については、当時の社会状況の反映と見ることもできるが、断定することはできない。

遺物は土師器を中心に、須恵器・石製品・土製品・鉄製品などが出土している。土器の完形品は、竈周辺および竈焼成部から多く出土し、しかも焼成部からの土器の出土状態は、使用されたままの状態が多かった。

各住居跡内から出土した土師器と須恵器を実測したものにだけについて分類（第103・104図）してみると、土師器が97%・須恵器が3%の出土率である。さらに土師器について器種別に分類すると、坏形土器43%・変形土器24%・壺形土器12%・甔形土器5%・塊形土器3%・高坏形土器3%・ミニチュア土器3%であり、その他鉢形土器・盤形土器が少量みられる。

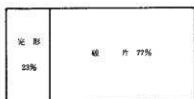
以上のように器種別に分類してみると、坏形土器が他の器種に比較して多く出土しているということは、坏形土器の使用目的が多様多様であったと考えられる。また、遺物の遺存状態のよい住居跡は第15号住居跡である。この住居跡からは変形土器4個・甔形土器1個・坏形土器6個がそれぞれ完形品で出土し、しかも変形土器は竈の焼成部および東側から倒立で、坏形土器は貯蔵穴の近くから重ねられた状態で出土している。すなわち、生活していた状態のままと考えられ、これらの土器の数は、一住居に住んだ人々が保有していた数であるとも推測できる。

土師器の器種の中でとくに注目されるのは、ミニチュア土器である。これらの土器が出土した住居跡は祭祀に関係するものと考えられ、石製模造品と関連づけて、後で述べてい。

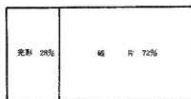
また、本遺跡で出土した須恵器は、蓋形土器・長頸壺形土器・坏形土器・変形土器・提瓶などの破片を含めて、計10個体である。これらの土器のうち住居跡に伴うものは、第4号住居跡の坏形土器（第16図-12）、第17号住居跡からの提瓶（第57図-8）の2個である。

石製品は滑石で作られた白玉・双孔円板・剣形品・三輪玉形の石製模造品のほか、紡錘車・砥石などが出土している。なお、滑石で作られた石製模造品が出土した住居跡は、第1・3・7～10・31号住居跡の7軒である。とくに第1・3号住居跡からは、床面上から白玉を、また、第7・9・10号住居跡からは双孔円板が5～8個それぞれ出土している。なお、これらの住居跡は、祭祀的性格の濃い住居跡と考えられる。

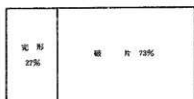
また、石製模造品とミニチュア土器が出土した住居跡について調べてみると、石製模造品が出土している住居跡は、住居跡分類のⅢ期に属するものが第1・7・8号住居跡の3軒、Ⅳ期が第



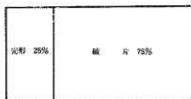
土師器埴形土器完形および破片の出土率



土師器鉢形土器完形および破片の出土率



土師器甌形土器完形および破片の出土率



土師器ミニチュア土器完形および破片の出土率

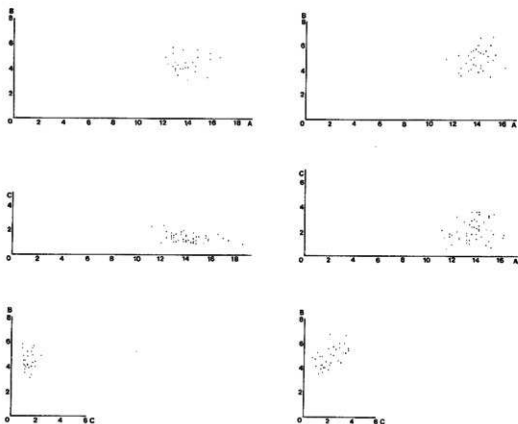
第104図 出土土器統計表

3・9号住居跡の2軒、Ⅴ期が第10号住居跡の1軒である。なお、第31号住居跡は擾乱がはげしかったため、住居跡分類は不可能であった。また、ミニチュア土器が出土した住居跡は、Ⅲ期に属する第4・8号住居跡の2軒、Ⅳ期が第3・9・28号住居跡の3軒、Ⅴ期が第2・29・35号住居跡の3軒である。すなわち、石製模造品は、Ⅲ期からⅤ期にかけて徐々に減少する傾向がみられ、Ⅴ期はほぼ消滅期と考えられる。これに対し、ミニチュア土器は、Ⅳ期からⅤ期にかけて、増加の傾向がみられ、お互い反比例の関係の有していることが判明した。なお、石製品からミニチュア土器への転換期はⅣ期であろうと考えられる。

土製品（球状土鏝）は、第2・35号住居跡の覆土上層から1個ずつ、第28号住居跡の西側床面上から集中して7個出土している。これらの球状土鏝は、漁撈用網などの鏝として利用されたものである。久慈川水系での当時の漁撈活動の一端をうかがうことができる。

以上、古墳時代に位置づけられた36軒の住居跡は、Ⅰ期からⅥ期に分類され、古墳時代後半、すなわち、鬼高期前期から後期にかけて作られた集落である。

また、古墳時代のその他の遺構としては、土壇8基が遺跡全体に分散して確認されている。これらの土壇の規模は直径1.4～2.2mの円形状のものが7基、長径1.7m・短径1.45mの楕円形のものが1基である。底面は全部平坦であるが、壁面は多様な形態がみられ、外傾するもの3基、内



第105図 環形土器A・B群分量比分布図 A—口径 B—器高 C—体高

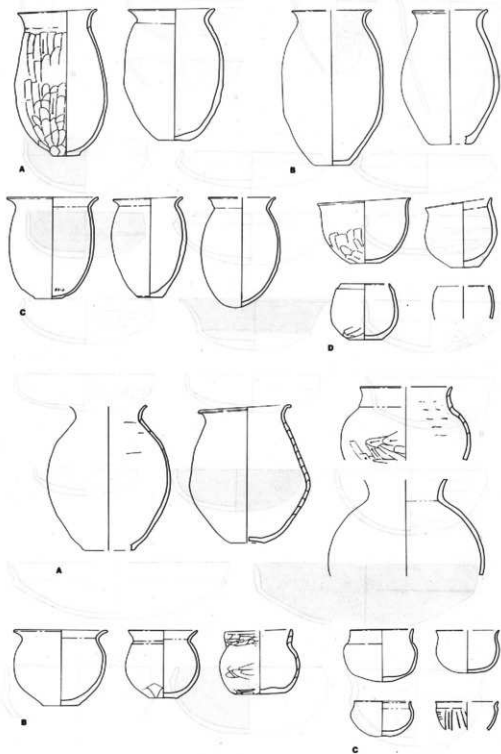
傾するもの1基、垂直に立ち上がるもの2基、底面近くでオーバーハングするもの2基である。また、覆土は全体にローム粒子・ロームブロックを含み柔らかく、色調は黒褐色・暗褐色を呈し、自然堆積の状態である。遺物の出土量は非常に少なく、第2号土壌の覆土上層から環形土器がほぼ完形の状態出土している以外はみな破片である。

また、土壌の構築時期については、住居跡との重複関係から次のようにいえる。第2号土壌は弥生時代の住居跡より新しく、しかも環形土器（分類B群）を前述したような状態で出土していることから、古墳時代の住居跡のⅡ期あたりに相当するものと考えられる。第5～7号土壌は古墳時代の住居跡の第5・17・25号住居跡よりも古い。すなわち、第5・7号土壌は住居跡のⅢ期よりも古く、第6号土壌は住居跡のⅤ期よりも古いものである。第3・4号土壌は古墳時代の住居跡の第29・32号住居跡よりも新しい。すなわち、第4号土壌は住居跡のⅠ期よりは新しく、第3号土壌は住居跡のⅤ期よりも新しい土壌である。

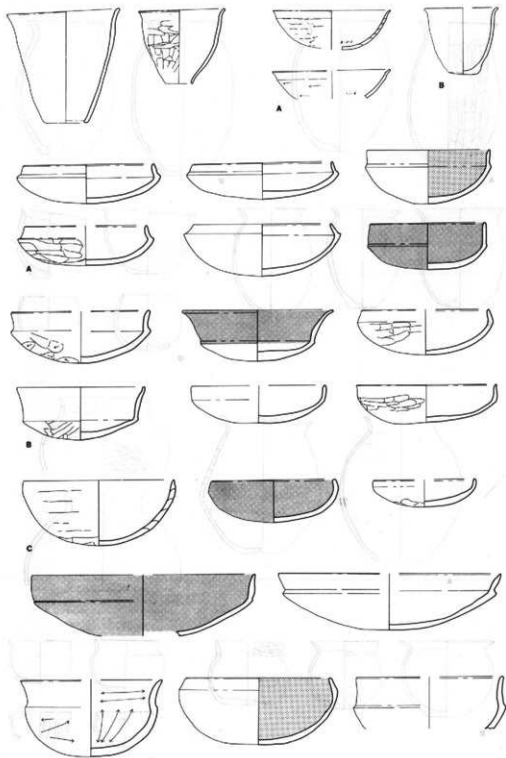
前述のようなことから、本遺跡から確認された土壌は、全てのものが同時期に作られたものではなく、古墳時代の住居が構築された時期全般にわたって作られた土壌であることがわかる。ま

た、用途についての決定的資料は得られず、一般的に考えられている貯蔵穴ではないかと考えられる。

以上、本遺跡から確認された遺構について、若干の分析を加えてまとめた結果、本遺跡の集落構成時期は、時間的な隔たりはあるものの大きくⅡ期に分類することができる。すなわち、Ⅰ期は弥生時代後半に位置づけられる小さな単一集落である。Ⅱ期は古墳時代後半の鬼高期に位置づけられる土壌を含む集落である。Ⅱ期に属する住居跡をさらに細分すると、前述したようにⅥ期に分けられるが、時間的な差は余り感じられず、連続的に人々の生活が営まれたと考えられ、当地方が最も栄えた時期と言える。

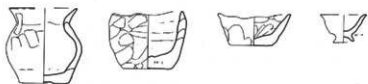
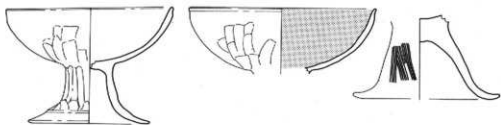


第106图 出土土器分類(1)



第107图 出土土器分類(2)

1953.11.16 2001



A



C



D



E

第108图 出土土器分類(3)

写 真 图 版

二 本 松 古 墳



二本松古墳遠景



二本松古墳切断状況



二本松古墳全景（西側）



石室露呈状況



二本松古墳全景（東側）



二本松古墳全景（北東側）

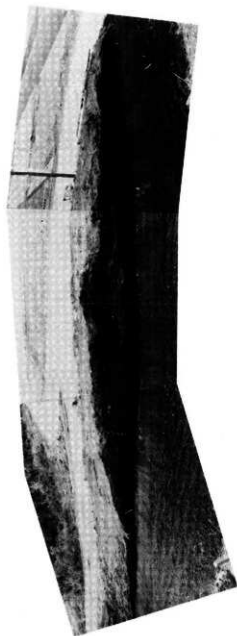
PL 4



南東側切断面土層（墳頂付近）



南東側切断面土層（周溝付近）



北西斷面土層

PL 6



主体部覆土断面



主体部上面礫群



主体部右側壁崩落状況(1)



主体部右側壁崩落状況(2)



主体部（後室）遺物出土状況



主体部（後室）



主体部（前室）



主体部（前室）右側壁

PL10



主体部全景



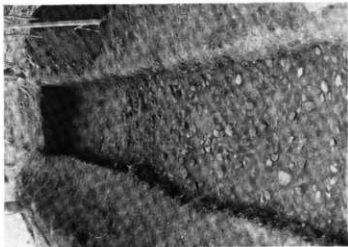
羨道右側壁



主体部上面葺石



北墳丘葺石



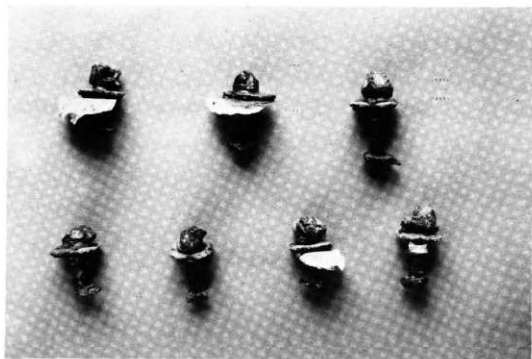
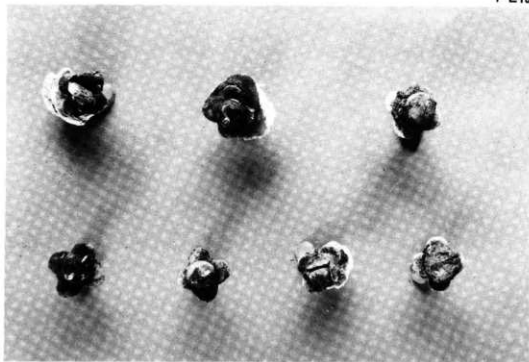
7号トレンチ葦石(2)



7号トレンチ葦石(1)



奥壁裏込め状況



主体部内出土遺物

PL14

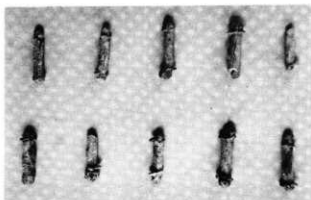
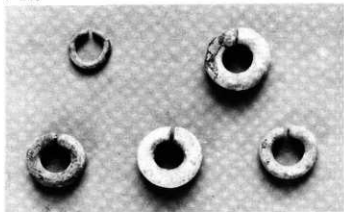


主体部内出土遺物

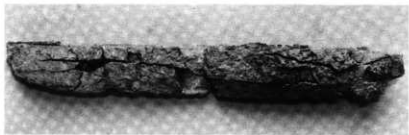


主体部内出土遺物

PL16



主体部内出土遺物



主体部内出土遺物

PL18

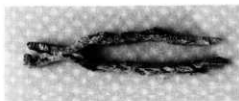
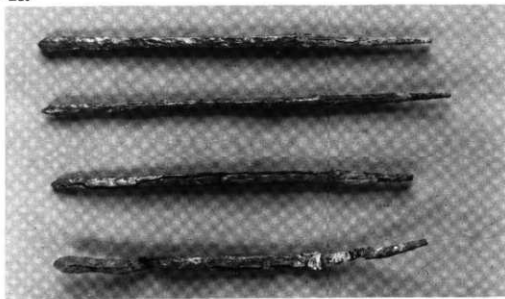


主体部内出土遺物

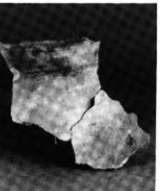
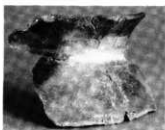
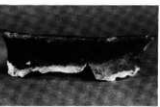
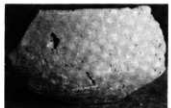
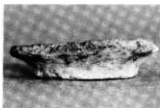


主体部内出土遺物

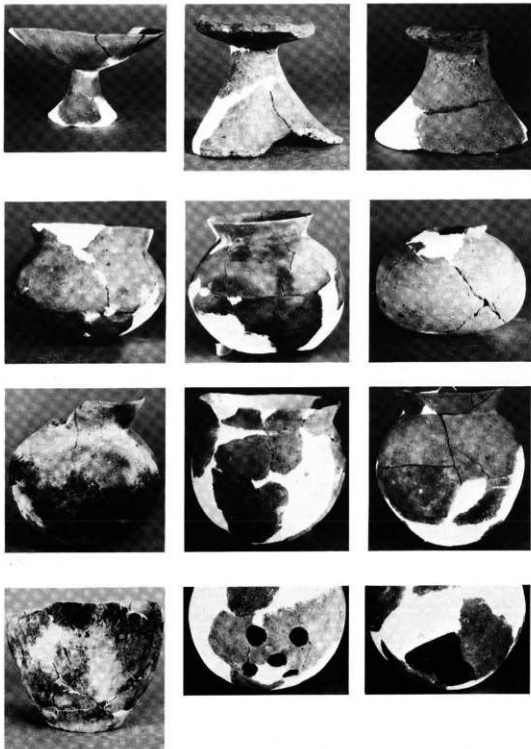
PL20



主体部内出土遺物



墳丘下出土遺物



墳丘下出土遺物

石神外宿 A 遺跡



表土排除後遺跡全景



遺構確認調査

PL 2



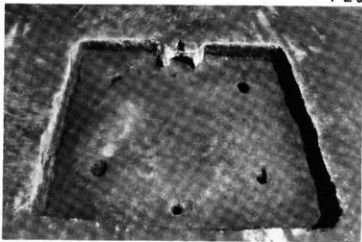
発掘前の遺跡



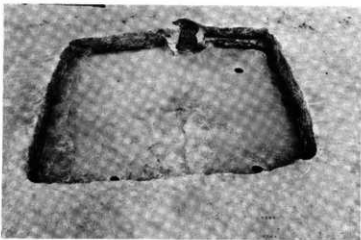
発掘前の遺跡



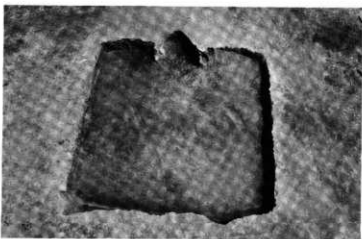
作業風景



第1号住居跡

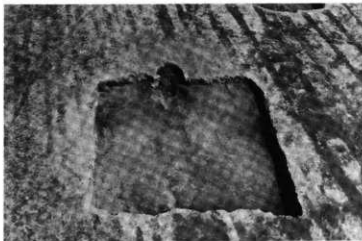


第2・10号住居跡

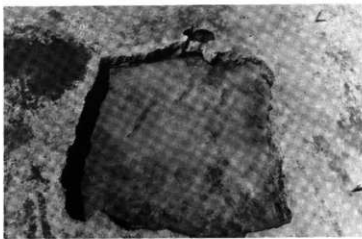


第3号住居跡

PL 4



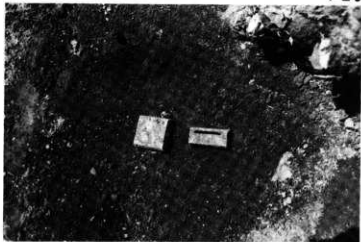
第4号住居跡



第5号住居跡



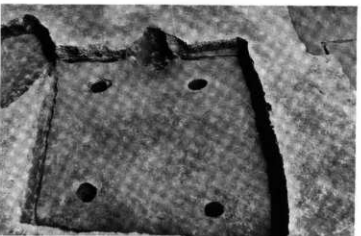
第6・7号住居跡



第 6 号住居跡帯金具出土状況

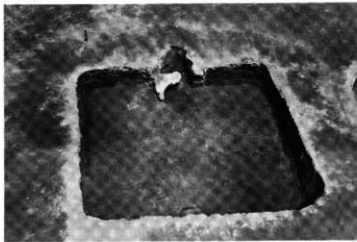


第 8 号住居跡帯金具出土状況



第 8 号住居跡

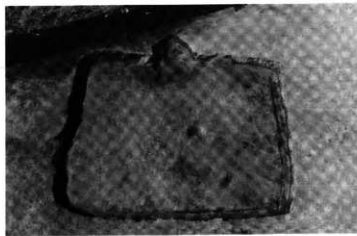
PL 6



第9号住居跡



第11号住居跡



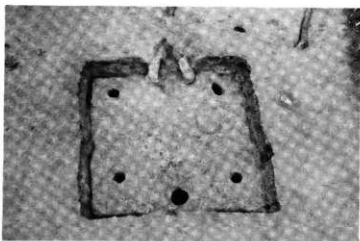
第12号住居跡



第13号住居跡

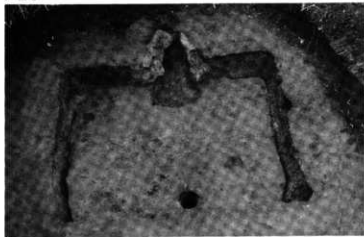


第13号住居跡土器出土状況



第14号住居跡

PL 8



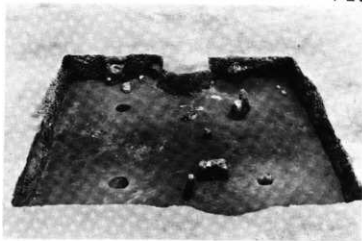
第15号住居跡



第15号住居跡鉄器出土状況



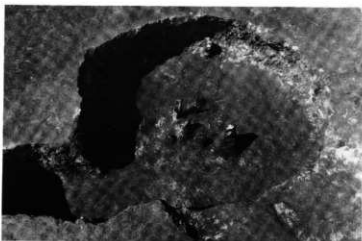
第16号住居跡



第16号住居跡遺物出土状況

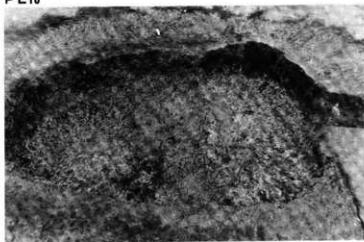


第16号住居跡土器出土状況

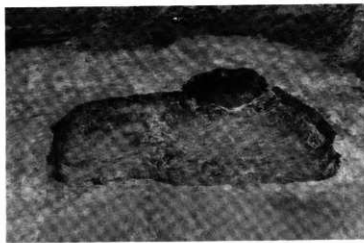


第1・2号土坑

PL10



第3号土墳



第4号土墳



第1号溝

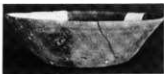


発掘調査風景

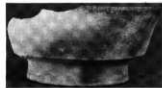
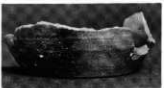
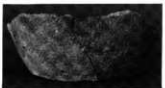
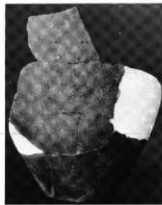


遺構全景

PL12

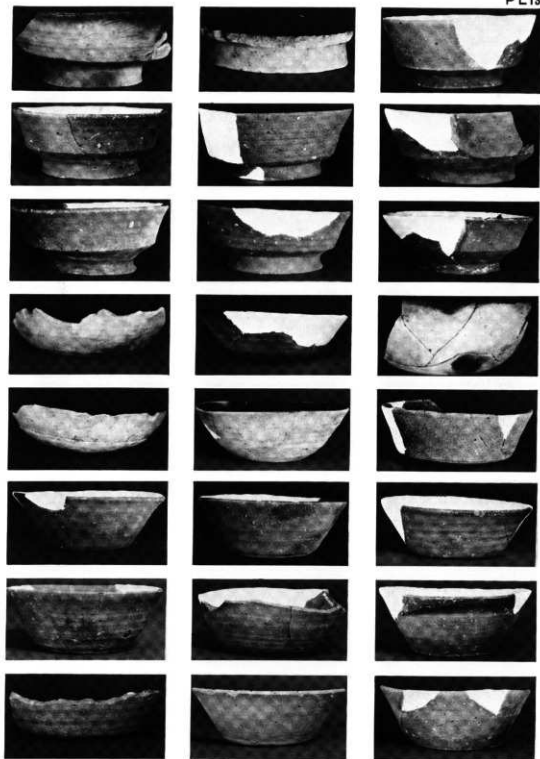


S I - 01



S I - 02

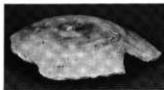
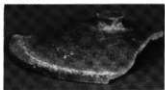
出土土器



出土土器

S 1-02

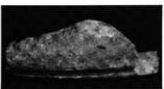
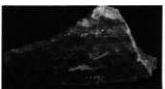
PL14



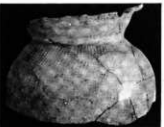
S I-02



S I-03

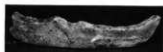


S I-04

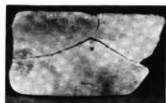


S I-05

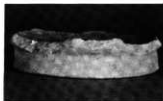
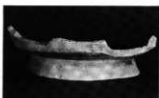
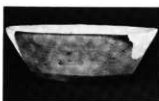
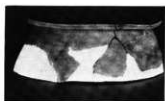
出土土器



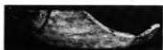
S I - 06



S I - 07



S I - 08



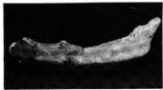
S I - 09



S I - 10

出土土器

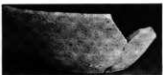
PL16



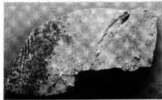
S I - 11



S I - 12



S I - 13



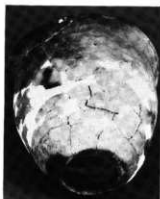
S I - 14

出土土器

PL17



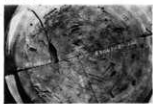
S 1-15



S 1-16

出土土器

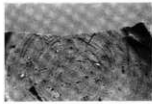
PL18



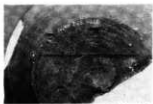
S I-01



S I-02



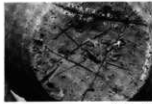
S I-02



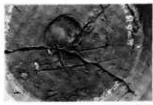
S I-02



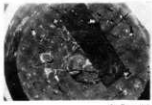
S I-02



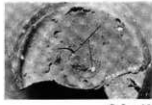
S I-02



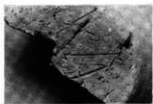
S I-02



S I-02



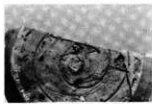
S I-02



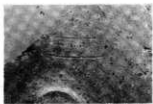
S I-02



S I-02



S I-02



S I-02



S I-02



S I-13

須恵器ヘラ記号



S I -06



S I -08



S I -01



S I -13



S I -08



S I -02



S I -09・12



S I -07



S I -04・05



S I -15



S I -08

銅製品・鉄製品

PL20



S I-05



S I-07



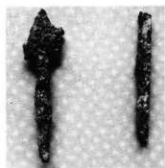
S I-02



S I-01



S I-10



S I-15



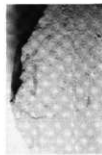
S I-02



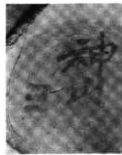
S I-02



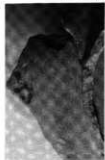
S I-02



S I-05



S I-08



S I-08



S I-13



S I-08

鉄製品・墨書土器

石神外宿 B 遺跡

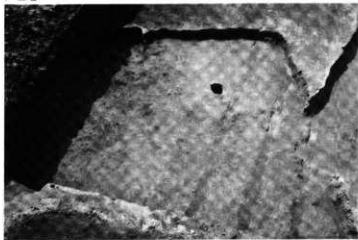


トレンチ調査

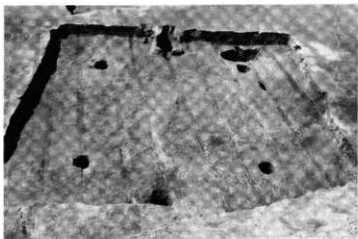


遺構調査

PL 2



第1号住居跡



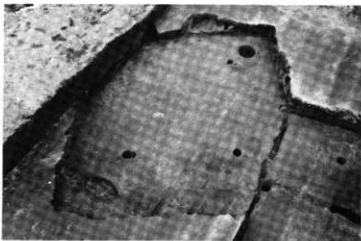
第2号住居跡



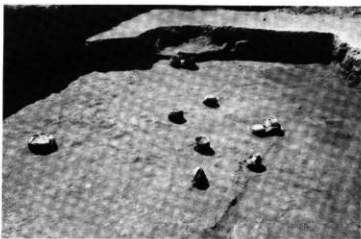
第3号住居跡



第3号住居跡土器出土状況

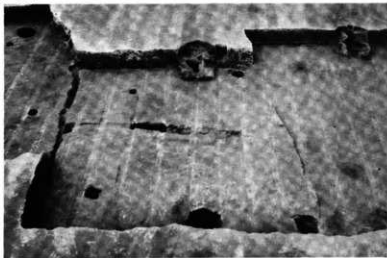


第4号住居跡



第4号住居跡土器出土状況

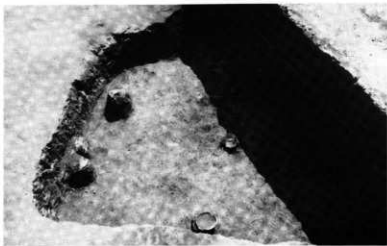
PL4



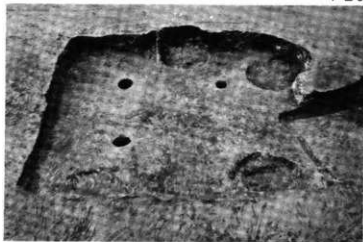
第5号住居跡



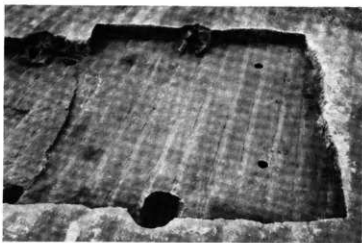
第6号住居跡



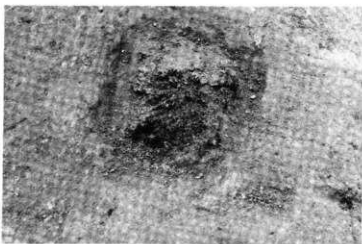
第6号住居跡土器出土状況



第7号住居跡

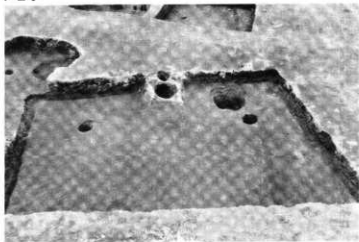


第8号住居跡

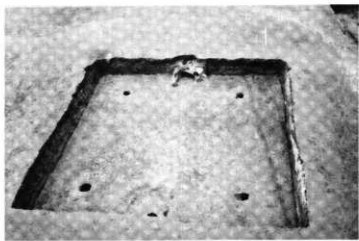


第8号住居跡柱遺存状況

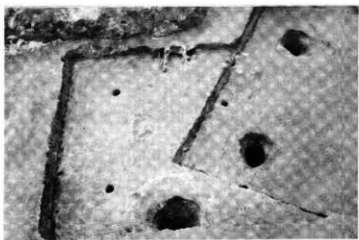
PL 6



第9号住居跡



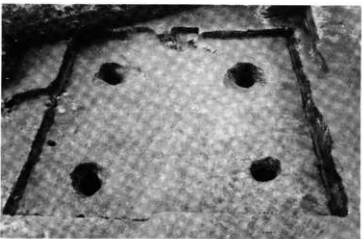
第10号住居跡



第11号住居跡



第11号住居跡土器出土状況



第12号住居跡



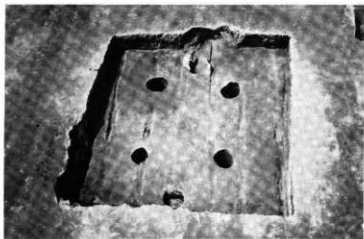
第13号住居跡



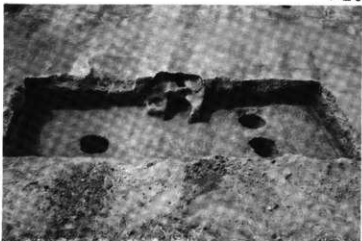
第13号住居跡土器出土状況



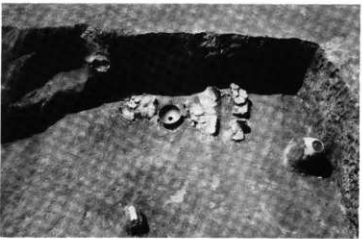
第13号住居跡土器出土状況



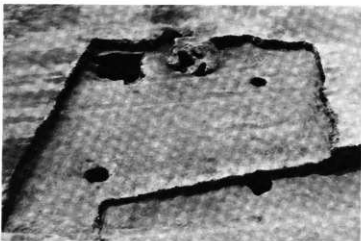
第14号住居跡



第15号住居跡



第15号住居跡土器出土状況

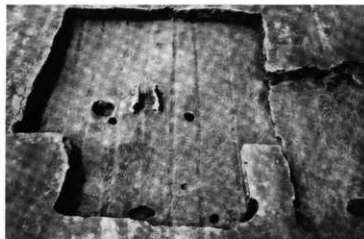


第17号住居跡

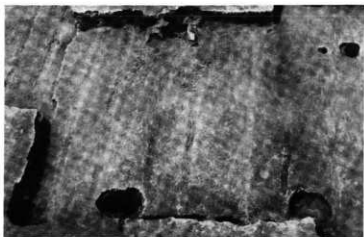
PL10



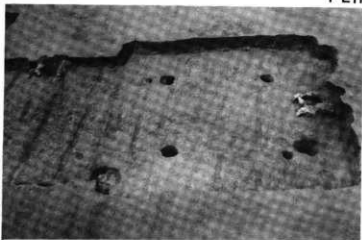
第17号住居跡土器出土状況



第16・19号住居跡



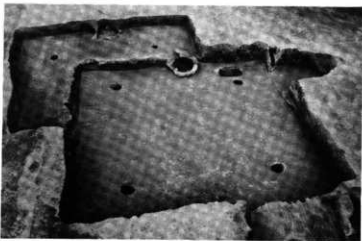
第18号住居跡



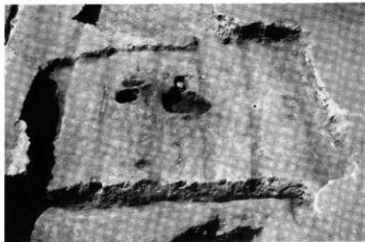
第21号住居跡



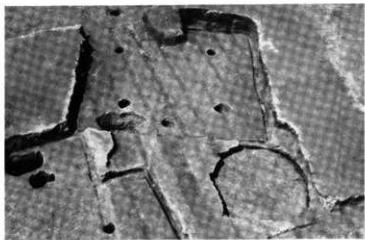
第22・23号住居跡



第24・29号住居跡



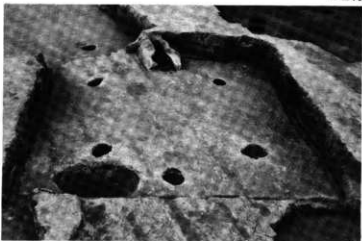
第25号住居跡



第26・27号住居跡



第26号住居跡土器出土状況



第27号住居跡

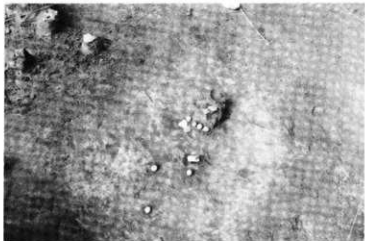


第28号住居跡

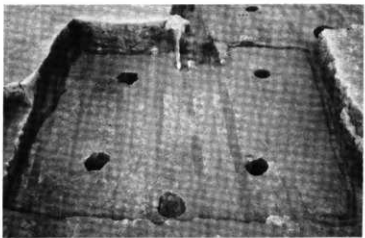


第28号住居跡土器出土状況

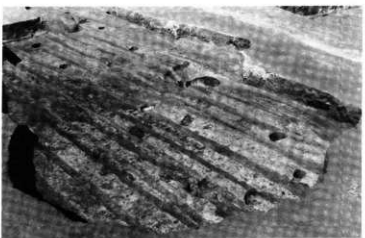
PL14



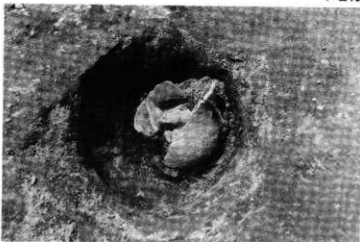
第28号住居跡遺物出土状況



第30号住居跡



第31号住居跡



第31D号住居跡土器出土状況



第31D号住居跡土製品出土状況

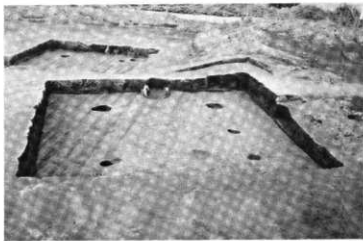


第32号住居跡

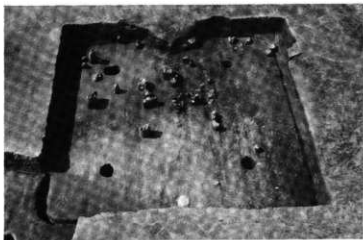
PL16



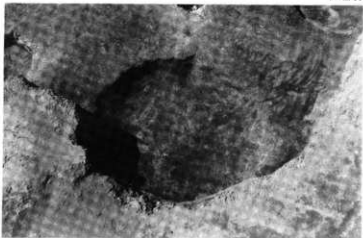
第33号住居跡



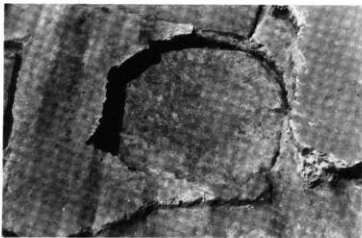
第34号住居跡



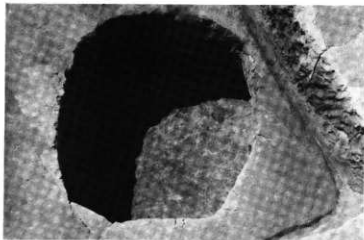
第35号住居跡遺物出土状況



第1号土坑

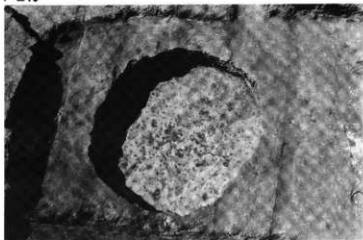


第2号土坑

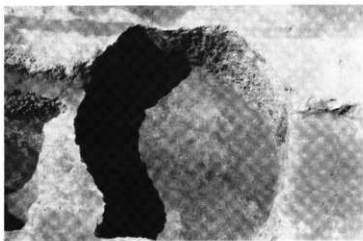


第4号土坑

PL18



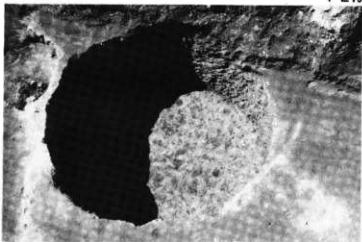
第5号土坑



第6号土坑



第7号土坑



第8号土坑



発掘調査風景



発掘調査風景



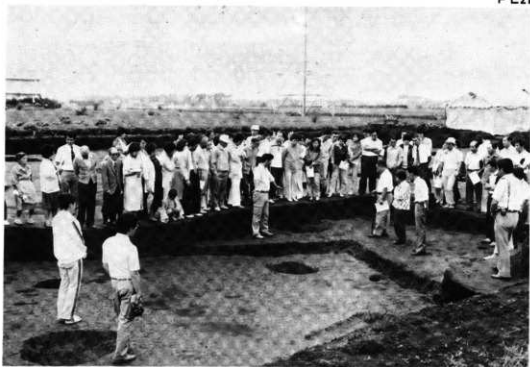
発掘調査風景



西側遺構全景



現地説明会



現地説明会

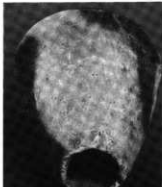


遺構全景

PL.22



S I-01



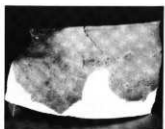
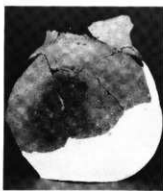
S I-02

S I-03

出土土器



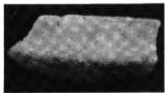
S I -04



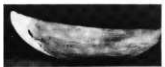
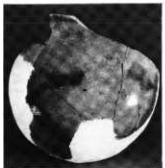
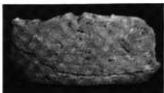
S I -05

出土土器

PL24

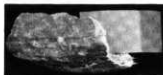


S I - 05

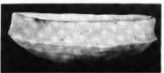
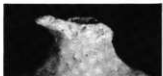


S I - 06

出 土 土 器



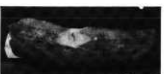
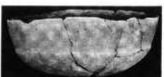
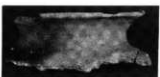
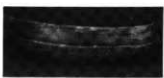
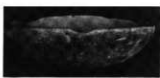
S I-07



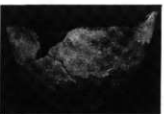
S I-08

出土土器

PL26

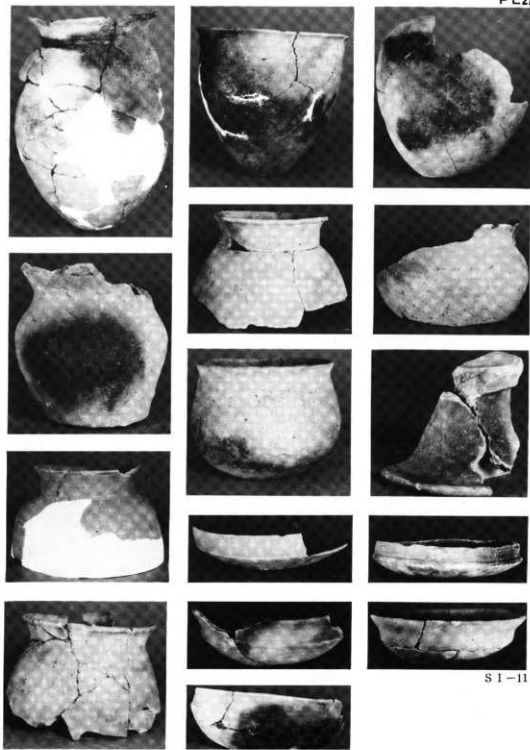


S I - 09



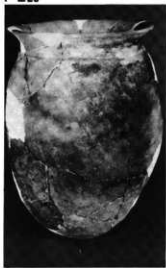
S I - 10

出土土器

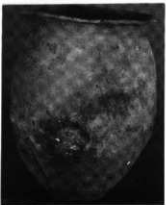


S 1-11

出土土器

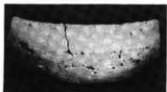
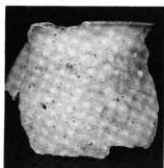
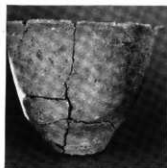


S I-12

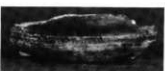


S I-13

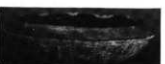
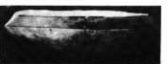
出土土器



S I - 13

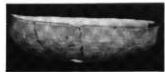
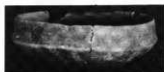
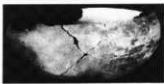
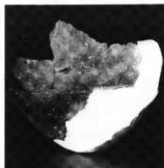


S I - 14

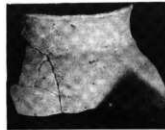


S I - 15

出土土器



S I -15



S I -16

出土土器

PL31



S I - 16



S I - 17



S I - 18

出土土器

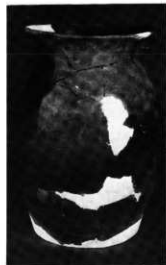
PL32



S I - 18

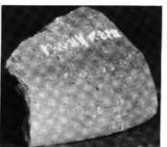
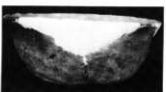
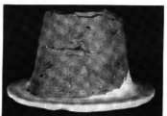


S I - 19

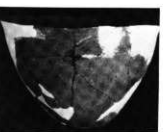
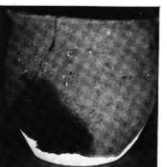


S I - 20

出土土器



S I - 20

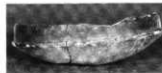
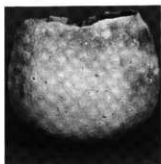


S I - 20

出土土器



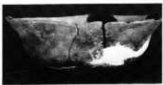
S I - 21



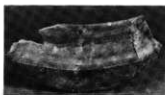
S I - 22



S I - 23



出土土器



S I-24

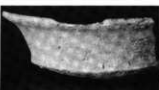
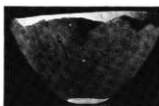


S I-26

S I-31



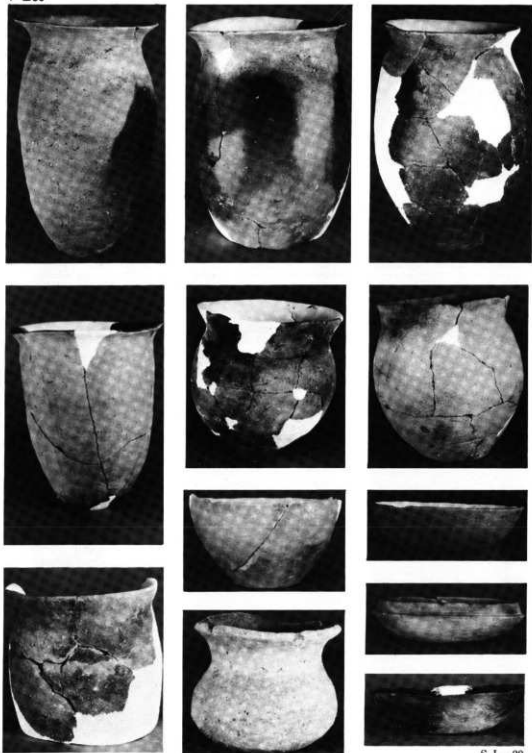
S I-31D



S I-27

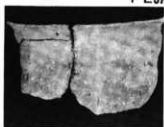
出土土器

PL36

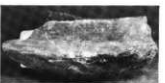
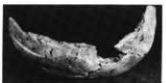


S I - 28

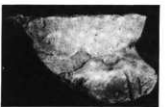
出土土器



S I - 29



S I - 30



S I - 31



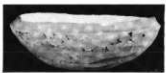
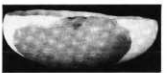
S I - 32

出土土器

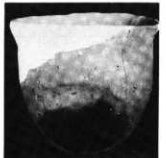
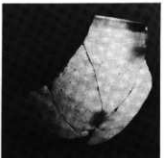
PL38



S I - 33

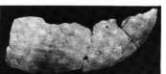
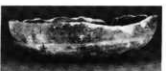
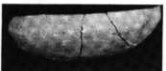
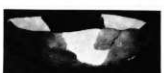
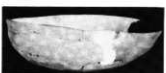
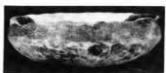
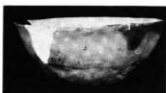


S I - 34

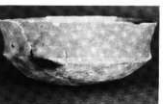


S I - 35

出土土器



S I - 35



S K - 2



表採

出土土器

PL40



S I - 8



S I - 11



S I - 13



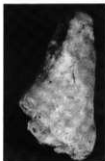
S I - 14



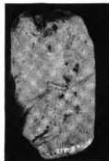
S I - 16



S I - 20



S I - 23



S I - 29



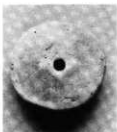
S I - 35



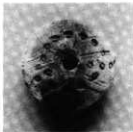
S I - 35



S I - 35

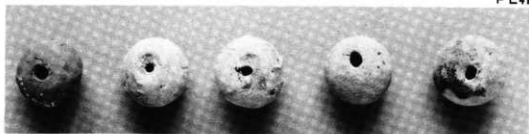


S I - 10



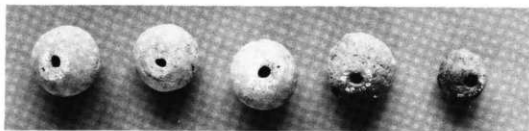
S I - 31

支脚・紡錘車



S I - 2

S I - 28



S I - 29

S I - 35



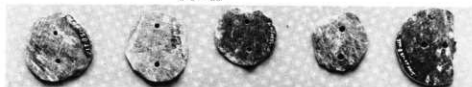
S I - 2



S I - 28



S I - 01 S I - 03



S I - 07

S I - 08

S I - 09

土製品・石製品

PL42



S I -09



S I -10 S I -31



S I -21

S I -30

S I -35



S I -28



S I -30

石製品・鉄製品

茨城県教育財団文化財調査報告第23集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書7

二本松古墳

石神外宿A遺跡

石神外宿B遺跡

昭和58年8月31日印刷

昭和58年8月31日発行

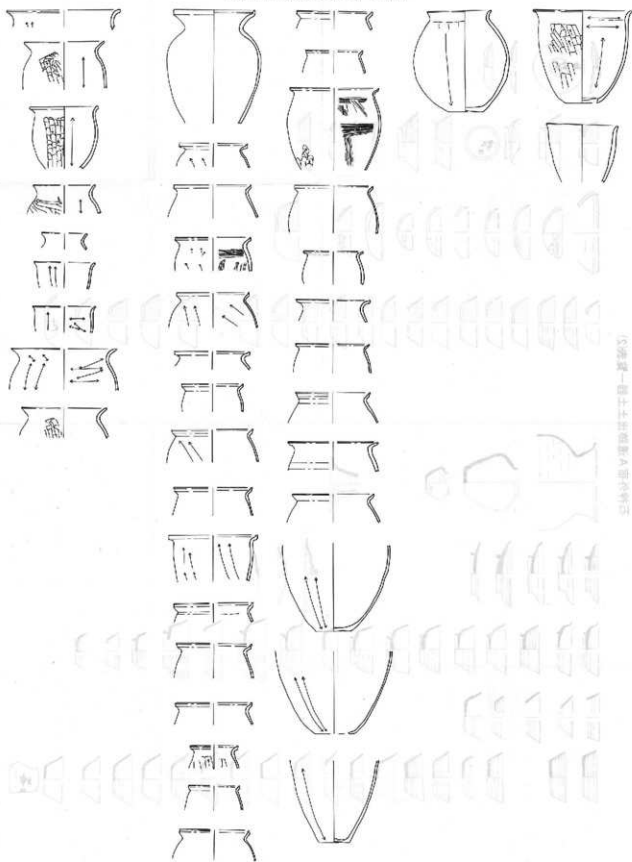
発行 財団法人 茨城県教育財団

水戸市南町3丁目4番57号

印刷 有限会社 三栄印刷

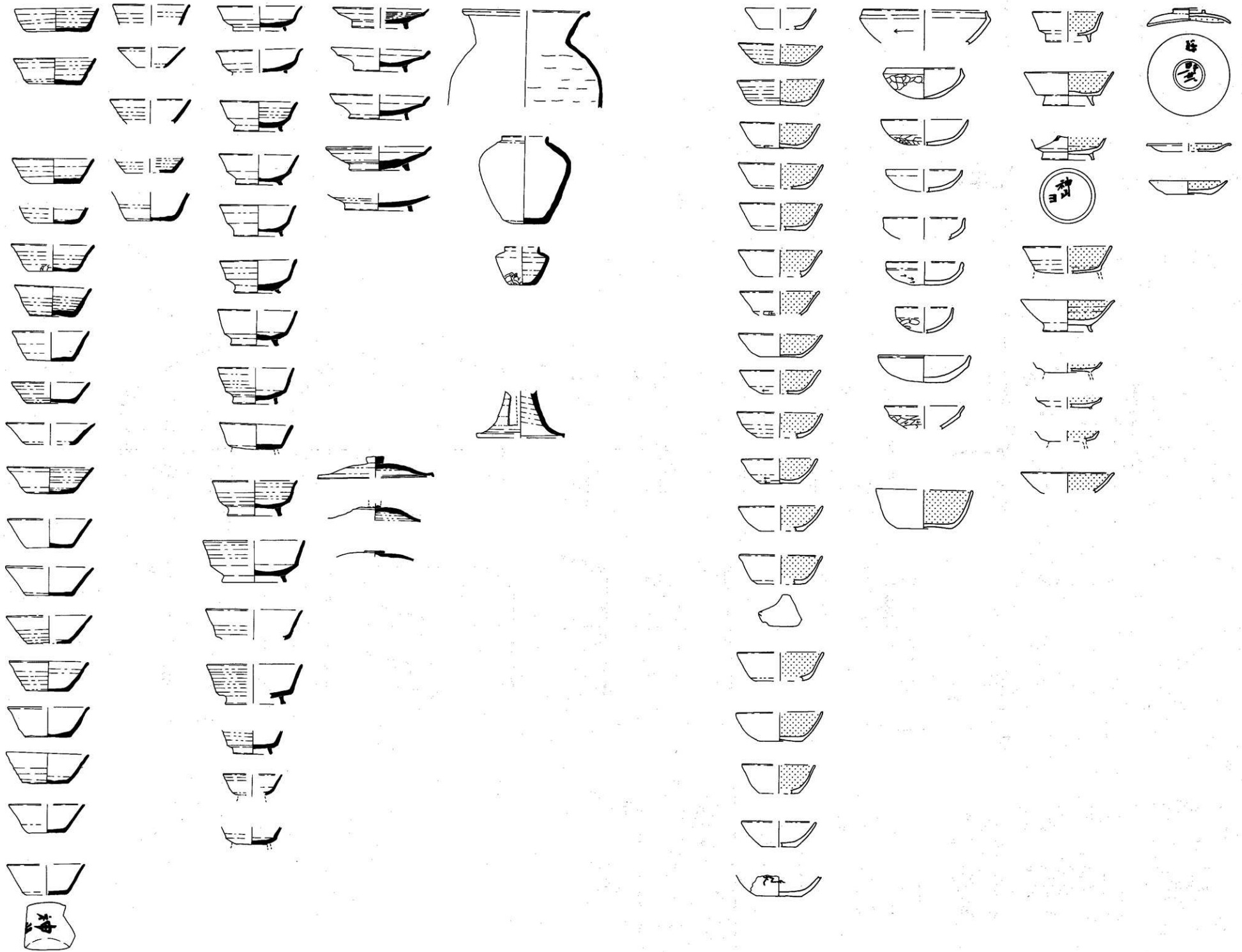
水戸市赤塚1丁目2010-1

石神外宿A遺跡出土土器一覽表(1)



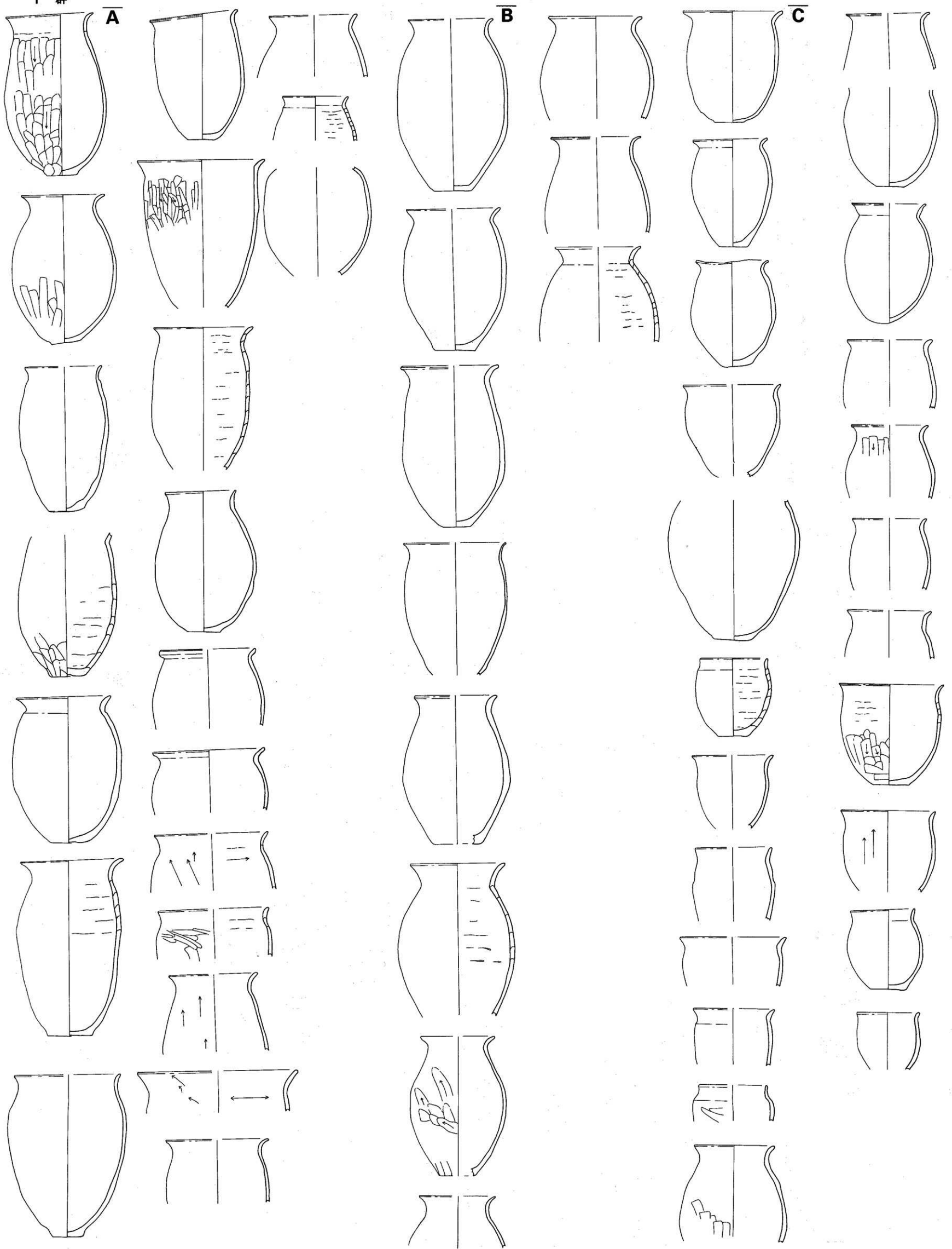
石神外宿A遺跡出土土器一覽表(1)

石神外宿A遺跡出土土器一覽表(2)



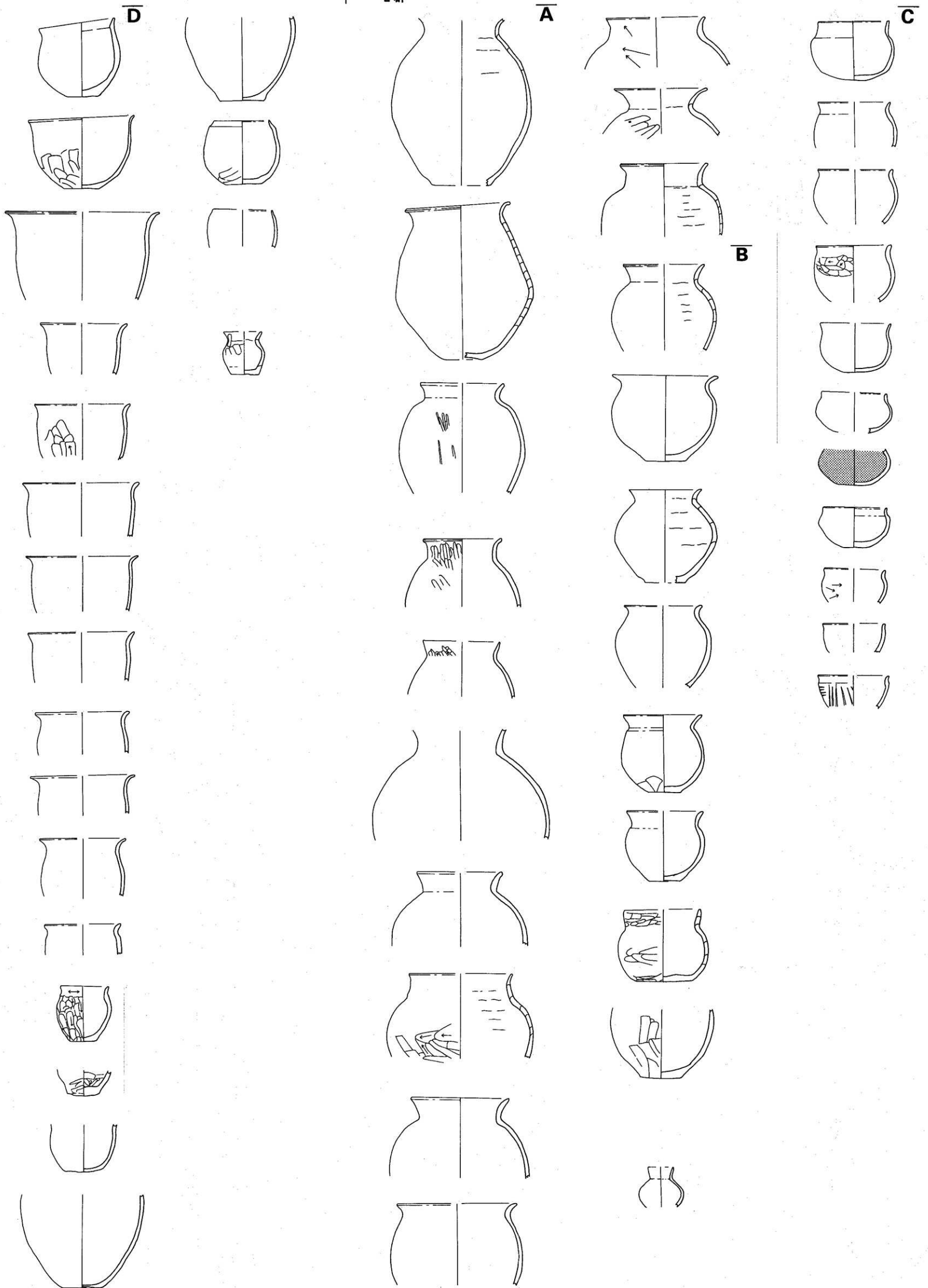
石神外宿B遺跡出土土器一覽表(1)

1 群

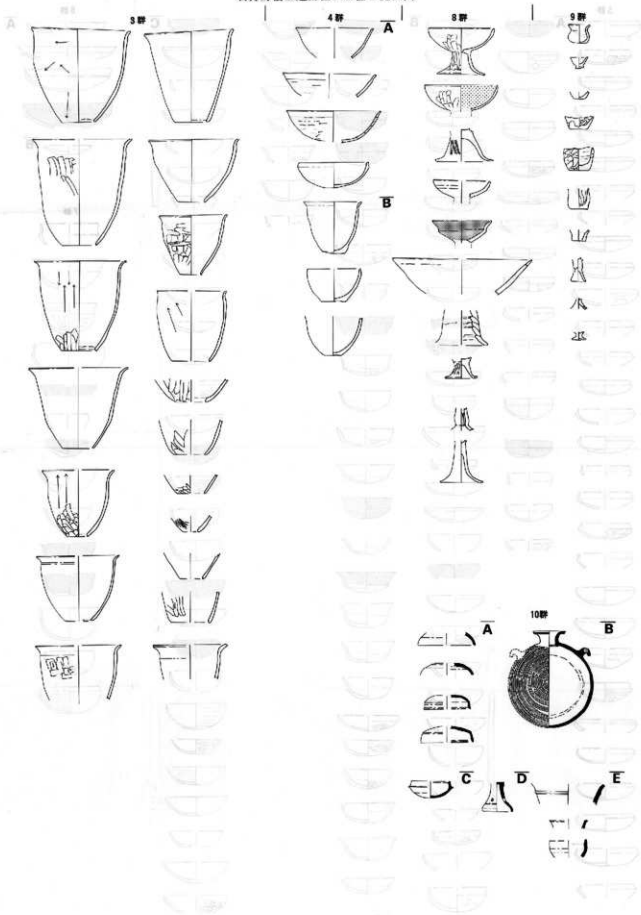


石神外宿B遺跡出土土器一覽表(2)

2群



石神外宿日遺跡出土土器一覽表(3)



石神外宿日遺跡出土土器一覽表(4)

